

南フランス・ガール県南部のロマネスク聖堂（2）

ーサン=ジルとその周辺ー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Sud du Département du Gard : Saint-Gilles et ses Alentours

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département du Gard, surtout alentours de Saint-Gilles-du-Gard. Ce pays correspond approximativement à l'est de l'ancien diocèse de Nîmes, et aujourd'hui au sud de l'arrondissement de Nîmes. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿ではガール県南部（およそ現在のニーム郡 Arrondissement de Nîmes）の、サン=ジルおよびその周辺に点在する中世のロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。

取り扱う聖堂は、ロマネスク期とは言っても厳密な時代の限定はせず、11・12 世紀のいわゆる盛期のロマネスク期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なりその時代の部分が残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる（なお建築の一部分がロマネスク期のものとなると、その数は非常に多くなり、その全てを網羅することは難しい。結局は残されたロマネスクの部分がある程度かによるのであるが、その選択は恣意的にならざるを得ないことはあらかじめ断っておく）。

聖堂の配列は、おおよそ現在の行政地域区分に準じて整理することとし、ガール県の県番号（30）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに

複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。名称については、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。聖堂内にある« chapelle » は「礼拝室」あるいは「祭室」とした。また「abbatiale」は通常「修道院付属教会」「修道院付属聖堂」などの訳語をあてることが多いが、本稿では「修道院教会」とした。採りあげる聖堂のほとんどは筆者が直接訪問・調査したものである。ただし私有地であったりアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問調査できなかったものには▲印を付した。それぞれの聖堂についての参考文献・資料などの参照情報は、各聖堂ごとに記したが、全体を通してのビブリオグラフィーは最後にまとめてある。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。

30.3.6a サン=ジル／サン=ジル修道院教会

(Église abbatiale de Saint-Gilles, Saint-Gilles)

サン=ジル、またはサン=ジル=デュ=ガール (Saint-Gilles-du-Gard) はラングドック (ガール県) の東端にあって、プロヴァンス (プーシュ=デュ=ローヌ県) との境界に位置する。アルルへは西に約 18 キロである (ニームからサン=ジルへは約 23 キロ)。カマルグ湿地帯の最西端でもある。古くからオリーブや果物、そしてニームとの間のコストリエールで作られるワインなどが知られるが、サン=ジルの名をひとときわ世に知らしめることになったのは、なんと言ってもこの街に創建された修道院とその輝かしい名声である。中世の間サン=ジルは、エルサレムやローマに次いでその名が知られた規模の大きな巡礼地であり、さらにフランスからスペインへ向かうサンティアゴ=デ=コンポステーラ巡礼路の起点の 1 つでもあった (それは「サン=ジルの道」と呼ばれた)。また十字軍や聖地エルサレムへの巡礼にとっても、ここサン=ジルは、フランスからの出港地なのであった。

サン=ジル修道院教会 (abbatiale) 西ファサードの彫刻は、プロヴァンスやラングドック、そしてローヌ地方など、南フランスのロマネスク彫刻に大きな影響を及ぼした (その影響はイタリアにまで及んでいる)。かつてプロスペール・メリメは、サン=ジルのファサードについて語るなら、優に一巻の書物にしなければならないほどであると記したが、まさしくその歴史や芸術は、限られた紙面ではとうていカヴァーしきれものではない。以下ではまず、サン=ジルの街と修道院の大まかな歴史をたどり、その後で修道院教会の建築と彫刻装飾について、その概略を述べてゆくこととしたい。

サン=ジルの街は、ローヌ川の西 2 キロにある高台の上に広がっている。すぐそば (東側) にはボーケールからエグ=モルト (あるいはセト) へと向かうローヌ運河が流れている。ローヌ川に近かったこともあって、最も古くはここから南へ約 4 キロの丘 (L'Argentièrre-Espeyran) の上に、紀元前 6 世紀前半頃ギリシア系フォカイア人の植民都市マッサリア (マルセイユ) が拠点を築いていたようである。ローマ時代に入った紀元 1-2 世紀にはそこは放棄され、新たに現在の場所にサン=ジルの集落が作られた。

サン=ジルの発展の歴史は、この街の名を与えた聖ジルの伝説と共に始まる。この聖人は、元の名をアエギディウス（Aegidius）といい、640年にギリシアのアテネで生まれたとされる（没年は721年。ただし生没年については異説もある）。665年頃、ギリシアを離れて南フランスにやって来た彼は、マルセイユに上陸後、司教カエサリウスの名声に引かれてアルルを訪れた。アルルではおよそ12年間を過ごし、その間も病気治癒などの奇蹟を行ったとされる。アルルの後は、ガルドン溪谷において、ヴェレデミウス（後にアヴィニオン司教にもなった聖ヴェレデーム）とともに3年間の隠修生活を送り、さらにローヌ川に近い森の中の洞窟に隠修生活の場を移し、神への祈りに満ちた日々を過ごした。そしてその洞窟にはいつの頃からか、この地方にはまれな美しい雌鹿が現れるようになり、ジルに寄り添って自分の乳を与えるなどするようになった（この洞窟があったのは、後にサン=ジル修道院が建てられた場所であったとも言われる）。



30.3.6a (図1) 聖ジルとワンバ

Melchior Doze (1878) 修道院教会内陳

ところで6世紀前半まで南ガリアを支配していた西ゴート王国は、フランク王国に北側から圧迫される形でイベリア半島へと領土を縮小し、560年には首都もトロサ（トゥールーズ）からトレドに移された。しかしセプトイマニアすなわちラングドックはいまだ西ゴート王国の支配下にあった。673年、ニームで王国に対する反乱が起こり、西ゴート王ワンバ（在位672-680年）によって鎮圧された。ニーム陥落後もしばらくこの地にとどまっていたワンバは、ある日のことニーム司教などを伴って狩りに出かけたのだが、射手の放った矢が、洞窟の中で隠修生活をしているジルと雌鹿を傷つけてしまった（図1）。放たれた矢をジルが手づかみにして鹿の命を救ったとも言われる。そのエピソードを描いた図像やステンドグラスでは、矢を受けたのがジルであったり鹿であったり、あるいはその両者であったりと、さまざまなヴァリエーションがある。いずれにしても、ワンバは自らの過ちを悔いて謝罪し、ニーム司教臨席のもとでジルに土地を寄進するとともに、ジルがそこに修道院を創建してその院長になることを要請した。ジルは最初はそれを辞退していたが、最後には承諾して聖ペテロと聖パウロに捧げられたサン=ピエール=エ=サン=ポール修道院を創建し、聖堂も2つ建設した。しかしその2つの聖堂は、おそらく719年頃にこの地方を襲ったイスラーム勢力によって破壊されてしまった。修道院の建設も中断し（あるいは破壊されてしまい）、ジルは一時オルレアンに避難したとされる。

ジルはラングドックに戻ったのち、サン=ピエール=エ=サン=ポール修道院において、司教杖とミトラを認められた修道院長となり、その後721年に亡くなった。9世紀になって再建された修道院は、聖人として崇敬を集めるようになった聖ジルの墓をその中に収め、新たにサン=ジル修道院と改名した（Monasterium S. (ancti) Egidii）。この聖人の名声はヨーロッパ中に響

き渡り、修道院には多くの巡礼が押し寄せるようになった。巡礼の数が増えるとともに、必然的に街と修道院には莫大な富がもたらされるようになった。その富を巡って、最初はニーム司教がサン=ジル修道院を自らの司教区に組み込んで支配権を及ぼそうとした。それに抵抗してサン=ジル修道院は、878年または879年に聖座（教皇ヨハネス8世／在位872-882年）の直接の保護下に入り、免税特権を得た。それはさらにベネディクトゥス7世（在位974-983年）など歴代の教皇によっても確認されている。

1066年、ラングドック東部にまで支配を拡大していたトゥールーズ伯家は、レーモン4世サン=ジルの母でありルエルグ、ニーム、ナルボンヌの女伯でもあったアルモディス(Almodis)がサン=ジル修道院をクリュニー修道院(院長はユーグ)に譲った。形の上は、教皇アレクサンデル2世からサン=ジル修道院を譲り受けたアルモディスとその子レーモンが、ニームのサン=ボディル教会(現存せず)において、今度はそれをクリュニー修道院に譲渡することを宣言したとされる。いずれにせよこの譲渡の際、サン=ジル修道院では院長ベラルドゥス(Béraldus)以下、修道士たちが一致してクリュニー傘下への移管に反対した。1074年に教皇グレゴリウス7世が乗り出し、サン=ジルとクリュニーの合併を宣言し、1077年にそれが発効した。ただしサン=ジルにはヴェズレーやモワサックのように、自ら修道院長を選ぶ権利が与えられた。クリュニーはすでに947年にユゼス司教区内のサン=サテルナン=デュ=ポール(Saint-Saturnin-du-Port [30.1.1])にブリウレ(小修道院)を所有していたが、ニーム司教区内においてもトルナックのサン=テティエンヌ修道院(Monastère St-Étienne de Tornac)とともにサン=ジルの獲得したのであった。以後、これらの修道院にはクリュニーを通してブルゴーニュの精神が浸透してゆくこととなる。

初めにも述べたように、サン=ジルは西に向けてはスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路の起点であったり、また同時に東に向けては聖地への巡礼あるいは十字軍の出発地でもあった。またローヌ川沿いのルートのみならず、オーヴェルニュから南下してきたレゴルダヌの道がやはりここサン=ジルで合流した。そうした地理的な卓越性と聖人への崇敬が結びついたことから、サン=ジルへの巡礼は10-11世紀に増加し、12世紀中頃にそのピークを迎えた。聖人の祝日である9月1日には、およそあらゆる国からやって来た5万人もの巡礼たちがサン=ジルの街にひしめいた。遠くはスカンジナビアからの巡礼もいたと言われる。当時のサン=ジルの繁栄ぶりを目の当たりにしたラビのベンジャミン・ドゥ・テュデル(Benjamin de Tudèle)は、1170-1172年の旅行記の中で巡礼たちが聖ジルの墓に押し寄せる様子を記しているが、また同時にその頃のサン=ジルの街には135もの両替商がいたと伝えている。こうした12世紀の繁栄の中、サン=ジル修道院は聖人の墓を収めるクリプトとその上に大きなロマネスク様式の聖堂の建設を始めた(建設の時期やそのプロセス、また聖堂の西ファサードの彫刻などの詳細については後述)。なお同じ12世紀には聖ヨハネ病院騎士団とテンプル騎士団がサン=ジルに定着している。共に拠点はサン=ジル修道院の南側の現在の運河沿いに作られた。前者はここサン=ジルがヨーロッパにおける最初の拠点であったし、後者はカマルグに広大な土地を所有した。

この時代、サン=ジルの街はヨーロッパ有数の商業地としても大いに発展することとなった。

修道院は、巡礼からの寄進を集めただけでなく、商人などから通行税も徴収し、莫大な収益を得た。しかしこうしてサン＝ジルに集まる経済的な富を、世俗の封建権力が手をこまねいて見ているはずもなく、さまざまに支配の触手を伸ばしてくるのであるが、そのうち最大最強のものはトゥールーズ伯家であった。11世紀以降のサン＝ジル修道院の歴史はトゥールーズ伯との対立・衝突の歴史でもある。

そもそも1077年のサン＝ジルのクリュニーとの合併自体が、トゥールーズ伯などの世俗領主による支配・強奪の動きに対抗するための施策であったとも言える。よく知られるように、クリュニーはローマ教皇による直接保護によって世俗権力の介入を排するものとされていた。しかしトゥールーズ伯はそうした保護を無視してサン＝ジルに対する介入を繰り返した。最初はトゥールーズ伯ポンス（在位1037-1060年）の時代、同伯家はニームやプロヴァンスに城を建設し、サン＝ジルにも領地を得ていた。ポンスの息子レーモン4世（トゥールーズ伯在位は1052-1105年）は初めて「サン＝ジル伯」を名乗り、サン＝ジル修道院長ガルテリウス（Galterius）とサン＝ジルの領地を折半した。彼はサン＝ジル修道院を直接略奪するなどもしたようで、1090年のトゥールーズ教会会議においてそれを謝罪し、サン＝ジル修道院に対する権利をいったんは放棄している。1105年、レーモン4世が第1回十字軍においてトリポリ攻略途上で病死すると、その後を継いだ長男ベルトラン（Bertrand／在位1105-1108/1109年）が、1107年にサン＝ジルの街に侵攻し、修道院を占拠するとともにその資産を強奪した。その際彼はサン＝ジル修道院の修道士たちを拘束して連れ去るとともに、修道院の北西にほとんど隣接する形で自らの支配拠点となる城塞を築いた。こうした行為に激怒した教皇パスカリス2世は、即座にベルトランを破門し、ナルボンヌ、ベジエ、モンペリエなどの領主（副伯たち）に、連合してベルトランに対抗するように要請した。結局ベルトランは同年のうちにヴァランスにおいて謝罪し、父（レーモン4世）の約定を守ることを誓ったうえで、1108（または1109）年に、4000の兵士とともにサン＝ジルの街を離れて聖地に向かった。彼は1112年にトリポリで没している。

1117年には今度はベジエ副伯ベルトラン（Bertrand）がサン＝ジル修道院長ユークを追放し、修道院の近くに自らの城を建設しようとする事件が起こった。時の教皇パスカリス2世（在位1099-1118年）はベルトランに対して聖務停止処分を下し、この副伯は捕らえられた。この後、修道院長ユークは教皇グラシウス2世（在位1118-1119年）をサン＝ジルに迎えている。1120年と1121年、教皇カリストゥス2世（在位1119-1124年）は、サン＝ジル修道院の領有権を侵害した世俗領主を破門に処すとあらためて宣言している。ベルトランの後を継いでトゥールーズ伯となったアルフォンス・ジュールダン（Alphonse Jourdain／在位1109-1148年）は、そうした教皇の意向を無視して再びサン＝ジル修道院と対立し、1120年に街と修道院を占拠している（敵対するアキテーヌ公の側にサン＝ジル修道院が味方したからであるとも言われる）。アルフォンスは教皇の抗議にもかかわらず、修道院に隣接する城塞建設を継続・強化した。また、彼はこともあろうにサン＝ジル修道院長ユーク（クリュニー修道院長ユークとは別人）を捕らえてボーケールの城に拘禁し、彼に再びサン＝ジルに戻らないことを誓わせたとうえでクリュニーに追放した（ユークは1124年に没）。1122年4月22日、教皇カリストゥス2世はアルフォンス・ジュールダンを破門、それに対してアルフォンスは1123-1124年の期間だけ教皇に

服従している。

1125 年頃、サン＝ジルの修道士たちは、再びクリュニーと対立する。これはクリュニーからの修道院改革の圧力が強化されたためであると思われる。この対立は 1132 年に解消している。これ以降、サン＝ジルの繁栄はいや増してゆくのであるが、そこに今度は異端の波が到来することとなる。その最初は異端者ブリュイのペトルス（Pierre de Bruys）であった。カタリ派の先駆者とも言えるこの異端者は、キリストの受難を汚辱として十字架の価値を認めない。また聖堂（教会堂）建設に反対し、幼児洗礼や聖体拝領、さらには死者への施しや聖人崇敬（そして聖遺物崇拜）なども否定した。1136 年頃、彼は南フランスにおけるクリュニーの先兵たるサン＝ジル修道院の前で、街中から十字架を切り取って集め、これを燃やしたことから捕らえられて火刑に処せられた（ペトルスの火刑の年については、1126 年から 1140 年まで諸説ある）。サン＝ジル修道院教会の西ファサードの彫刻プログラムは、この異端者ペトルスの主張に反駁するためのものであったとする見方が有力である（後述）。

サン＝ジルへの巡礼は、教皇ハドリアヌス 4 世（在位 1154-1159 年）が 40 日間の贖宥を認めたこともあっていよいよ盛んとなるが、それとともに 1160 年代に入るとクリュニー本院が、有名な第 3 聖堂建設を進めたことから財政難に陥り、サン＝ジル修道院は再びクリュニーからの独立の姿勢を強化していった。しかし 1179 年になると、サン＝ジルは今度はトゥールーズ伯レーモン 5 世（在位 1148-1194 年）とアラゴン王の間の闘争に巻き込まれてしまう。アラゴン王は、ベジエ副伯・ニーム司教と手を結んでいたこともあって、サン＝ジル修道院とニーム司教の対立も再び鮮明になった。またちょうど同じ頃、ラングドックで異端カタリ派の活動が活発化し、サン＝ジルの街でもいくつもの教会が荒らされたり焼かれたりしている。そうしたこともあって、この時期に進められていた修道院上部教会の建設工事は中断を余儀なくされている。それに対して修道院に隣接する城塞の方は、トゥールーズ伯レーモン 5 世ならびにその後を継いだレーモン 6 世（在位 1194-1222 年）によって引き続き建設が進められていった。1196 年、教皇ケレスティヌス 3 世（在位 1191-1198 年）はレーモン 6 世に対してその城の破却を命じているが、伯は聞く耳を持たず、教皇から破門の警告（1198 年と 1199 年）を受けている。

修道院教会建設工事は 1185 年に再開されていたものの、今度は 1209 年に異端カタリ派に対するアルビジョワ十字軍が開始され、その後 50 年にもわたって工事が全面的に中断されてしまう。その前年の 1208 年 1 月、異端対策のために派遣されていたシトー会修道士で教皇特使ピエール・ドゥ・カステルノー（Pierre de Castelnau）が、恐らくはトゥールーズ伯の手のものによってサン＝ジル（またはアルル）において暗殺された（彼の墓はサン＝ジル修道院教会地下クリプトにある）。同年のうちに教皇インノケンティウス 3 世はレーモン 6 世を破門し、翌 1209 年になって、主に北フランスの領主たちに向けて異端カタリ派に対する十字軍を呼びかけたのであった。レーモン 6 世は 1209 年 6 月 18 日（あるいは 12 日）、上半身裸という姿でサン＝ジル修道院教会の前に来て謝罪し、さらにその頃には完成していたと思われる教会の地下クリプト（下部教会）のピエール・ドゥ・カステルノーの墓の前で鞭打ちを受けた。サン＝ジルにおけるこの日の出来事は、アルビジョワ十字軍の歴史の中でも最もドラマチックなシーンであったと言われる。この後レーモン 6 世は、形の上は十字軍側に参加するものの、異端

やその味方をする南仏諸侯との戦いには消極的で（1211年のモンペリエの教会会議において再び破門）、サン＝ジル修道院に対しても相変わらず干渉を続けていたようである。伯は1212年にもサン＝ジル修道院の建物を破壊したことに對して教皇から警告を受けている。

トゥールーズ伯とアルビジョワ十字軍との戦いは1217年にレーモン6世が息子と共にトゥールーズを奪回するなど伯側に有利に進み、レーモン6世が1222年に亡くなった後は、その息子がレーモン7世（在位1222-1249年）として伯位を継いで戦闘を継続する。しかし国王ルイ8世（在位1223-1226年）が新たに十字軍を率いて南仏の征服に乗り出してからはその戦闘は一進一退を続け、結局レーモン7世はルイ8世を引き継いだルイ9世（サン＝ルイ、在位1226-1270年）と1229年にパリ条約（またはモー条約。娘を王弟アルフォンスと結婚させる協約）を結ぶに至り、アルビジョワ十字軍は終結した。

12世紀後半頃からサン＝ジルでは、異端やアルビジョワ十字軍が引き起こす騒然とした雰囲気の中で、巡礼の数が減少に転じる。1180年代にはすでにサン＝ジル修道院の財政は悪化していたとも言われる。アルビジョワ十字軍終結後、国王ルイ9世（サン＝ルイ）の庇護のもとでいったんは繁栄が続くかのようにも思われたが、ルイ9世が1240年頃から新たにエグ＝モルト（Aigues-Mortes）の街と港を建設したことが、サン＝ジル没落の決定的な要因となった。エグ＝モルトは、サン＝ジルから直線距離にして約25キロ南西で、当時は地中海に直接面しており、聖地への十字軍出発にとって、そして東方貿易にとっては、サン＝ジルよりもはるかに便利な場所であった（それでもルイ9世は、1254年と1270年の2度、サン＝ジルの訪れている）。

1260年代に入って、サン＝ジル修道院では建築家マルタン・ドゥ・ロネー（Martin de Launay）と契約し、中断していた修道院教会の工事を再開させている。この街出身の教皇クレメンス4世（在位1265-1268年）は、建設工事費用捻出のためにサン＝ジル修道院への寄進者に100日間の贖宥を認めている。しかし13世紀後半には巡礼の数がさらに減少し、巡礼地としての人気は、ロカマドゥール（Rocamadour）などに奪われていった。

14世紀には、サン＝ジル修道院上部教会の身廊と内陣・トランセプトが接続し、建設工事はほぼ終了していたようである。ただし修道院の収入不足のために屋根と鐘塔が未完成であった。教皇ユリウス2世（在位1503-1513年、元サン＝ジル修道院長）は、修道院に寄進した巡礼者に対して再び贖宥を認めている。しかし16世紀になると、サン＝ジル修道院は止むことのない規律の弛緩に見舞われたようで、それを受けて1538年、教皇パウルス3世（在位1534-1549年）は修道院の世俗化を決定し、修道院教会もコレジアル（参事会聖堂）となった。

16世紀も後半になると、サン＝ジルの街と修道院は今度は宗教戦争の争乱に翻弄されることとなる。中でも1562年9月には、街はプロテスタントによる大規模な侵略を受け、彼らはカトリックを殺戮し、ローヌ川に投げ込むなどした。修道院でもプロテスタントはカトリックの聖職者や修道士たちを虐殺し、聖歌隊の子供たちとともに修道院教会地下の井戸に投げ込んだとされる（井戸は現在も地下クリプトに残る）。また修道士の居館や文書館などが焼かれ、教会は身廊部のヴォールトが崩落し、鐘塔が破壊された。教会西ファサード扉口を飾る彫刻群も、プロテスタントのマスケット銃部隊の銃撃によって破損した。このファサードにある十二使徒その他の多くの人物彫刻の頭が破壊されたのもこの時のことである。1574年には、カトリック

側の軍が、街と修道院を奪回すべく、モンモランシー＝ダンヴィル (Montmorency-Damville) 率いるプロテスタント軍と戦っている。この戦いの中でサン＝ジル修道院の破壊がさらに進んだ。サン＝ジルの街はプロテスタントが引き続き占領し、彼らはサン＝ジルの街に陣地を構築するとともに修道院の要塞化を進め、1622 年 7 月まで部隊を駐留させた。7 月 20 日、カトリックである国王軍が到来するとの知らせを聞いたプロテスタントのリーダー、ロアン公 (Henri II, Duc de Rohan) は、敵が修道院を占拠・利用するのを妨げるために建物の破壊を命じた。しかし実際にその命令が実行に移される前に国王軍がサン＝ジルに到着し、幸いにも修道院教会のクリプトと西ファサードの破壊は免れたのであった (ただし内陣部と身廊の一部は破壊された)。

サン＝ジル教会は、ルイ 14 世の時代である 1650-1655 年に、カトリックによって教会の部分的な修復が行われた。サン＝ジルの住民たちはリュネル (Lunel) の 2 人の石工と契約し、修復のための代金を払っている。上部教会は身廊部西側の 6 つのベイのピアと壁面を利用しつつヴォールトが再建された。東側は多角形の後陣壁で閉じられ、東西の長さが短縮された。かつての身廊部から切り離された内陣や西ファサードの中央のタンパンなども修復された。またこのファサードの上には南側に慎ましやかな鐘楼が建てられた。

17 世紀のこうした修復にもかかわらず、修道院教会には 18 世紀の大革命によって決定的なダメージがもたらされることとなった。1790-1791 年に、上部教会の身廊が破壊され、そこから切り離されていたロマネスク期の内陣も、有名な螺旋階段 (vis) とそこに隣接するごくわずかな壁面を除いてすべて取り壊されてしまった。内陣の遺構と敷地は国有財産として売却されたが、螺旋階段部分は奇跡的に売却を免れたのであった。

革命期には西ファサード中央の二重円柱および北扉口の右側円柱も破壊されているが、このファサードには 19 世紀になって全体的な修復の手が加えられた (1842-1868 年。この修復を担当した建築家は Questel と Rivoil)。ファサード前の階段が作られたのはこの時期のことである。また地下クリプト (下部教会) において、聖ジルの墓と遺骸が再発見されたのもこの 19 世紀の修復期間中の 1865 年のことであった。その百年後の 1965 年には地下クリプトの聖ジルの墓への巡礼の訪問が再開された。なお、修道院教会後陣にほとんど隣接する形で建設されていたトゥールーズ伯の城館は、19 世紀初めに現在の市役所が建設される際に取り壊されている。

サン＝ジル修道院教会 (abbatiale) において、現存するロマネスク期の部分は、地下クリプト (下部教会)、上部教会の西ファサードと西側の 6 つのベイの壁面の土台部分から大アーケードの起拱点まで、また遺構として残る東側の内陣と後陣回廊および放射状祭室、そして有名な螺旋階段 (vis) である。

ロマネスク期の上部教会は、およそ 12 世紀に建設が進められたのであるが、途中で計画の変更が行われたり、長い期間にわたって工事の中断と再開が繰り返されたために、より正確な建設年代については、それを明確に確定することが困難な状況にある。建設開始時期については、最も早くは 1095 年頃に着工されたとする説から、最も遅くは 1240 年頃とする説までさ



30.3.6a (図2) Église abbatiale de Saint-Gilles

まざまである。上部教会南側外壁の1番目の扶壁（西ファサードの南西角の扶壁を数えるなら西から2番目の扶壁）の下に埋め込まれた有名な碑文（これは修道院旧クロトルの北側のギャラリーにあたる）に、「1116年の4月、復活祭の月曜にサン＝ジルに捧げられた教会の建設が始まった」と刻まれていることから（図3）、これまで多くの研究者が、ロマネスク期の最初の聖堂（つまり聖ジルの墓を覆う建物である現在の地下クリプトにあたる）の建設開始を1116年としてきた。その後、押し寄せる多くの巡礼を受け入れるために当初の建築計画の変更が行われ、より大きな聖堂をその上に建設する工事が進められたとされる。

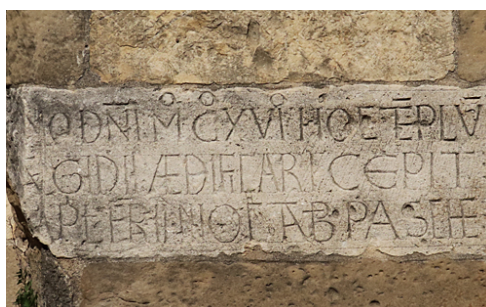
とりわけ西ファサードの建設時期やそのプロセスについては、19世紀以来今日まで、いわゆる「サン＝ジル論争」と呼ばれるほど、多くの研究者によって実にさまざまな見解が提起されてきた。

R. de Lasteyrieによれば、西ファサードは最初は単純な装飾だけだったが、その後1140年頃から12世紀末に至るまでの長い期間にわたる工事と中断を繰り返し、その都度制作者も変わったために西ファサードの彫刻群は全体として変則的で統一性を欠いたものとなったとする。

L.-H. Labandeは、西ファサードを12世紀半ば、あるいは12世紀最後の4半世紀とする。

A. Kingsley Porterは、工事のプロセスを2つに分け、ファサードの中央扉口は1135-1142年頃のもの、そして後から追加された左右の扉口は1180年以降のものとした。このように全体の工期を2つ（あるいは3つ）に分けて考えるやり方は、W. Horn、M. Gouronにも踏襲されてゆく。それらの主張にはそれぞれヴァリエーションがあるが、おおよそ12世紀半ばの段階では扉口は中央のものだけで、そこには二重円柱で支えられたロンバルディア様式のポーチが作られており、エンタブレチュアや小円柱の列はなかったが、12世紀終わり頃からの2番目の工事の期間中に大がかりな修正・修復が行われたとする。左右の扉口が作られ中央のポーチは撤去されるとともに、エンタブレチュア付きの円柱列が追加され、さらに受難のフリーズが制作され、彫刻装飾全体の統一化が図られたのもこの時期であるとされる。

R. Hamann は、西ファサードの工事期間を 2 つに分けることは認め、最初の工期は 1100 年以前 (1096 年頃) とし、1116 年にプランの変更が行われたとする。しかし左右の扉口については、十二使徒の彫像や円柱列とともに、最初から計画されていたと考えた。その後のプラン変更によって、古代の凱旋門をモデルとしたものからより中世的な形式へと全体の意匠が変わり、クリュニー (つまりはブルゴーニュ) の影響によって受難と復活に重点を置



30.3.6a (図 3) 1116 年の碑文

いたタンパンやフリーズが付け加えられたとする。そのうえで彼はサン=ジルに「南フランスにおける前期ルネサンス (Proto-Renaissance)」の出現を見て取るのである。

地下クリプト西側の壁では、1142 年の日付のある墓碑銘が埋め込まれているのが発見されており、これをその西壁の上に作られた西ファサードの建設年代の根拠とする見方があるが (1140 年説)、M. Schapiro によれば、その碑銘の年代は、あくまでも西ファサードの下土台部分にのみ有効であるのに過ぎない。彼はそれとは別に地下クリプト西壁で発見された 1129 年に死亡したとされる人物の 3 つの墓碑銘を根拠に、西ファサード制作を 1129 年以降とした。仮にそれよりも早い時期に制作年代を設定すると、ファサードよりも古い地下クリプト (下部教会) の交差リブは、北フランスのゴシック・リブよりもさらに早いことになってしまうと指摘している。

M. Gouron は、左扉口と中央扉口の間の左側の二人の使徒、聖マタイと聖バルトロマイの彫像に「ブルヌスが作れり」と名前が刻まれていること、そしてこのペトルス・ブルヌス (Petrus Brunus) なる人物が、1171 年の文書 (サン=ジルにおいて締結されたトゥールーズ伯レーモン 5 世とジェノヴァの同盟文書) と 1186 年の文書 (ニームの聖堂参事会とサン=ジル修道院の協約文書) にペトルス・ブルヌスが署名人として現れること、そしてとりわけ後者にはこのブルヌスが「木像と石像の達人」 (artifex in opere ligneo et lapideo) であると記されていることから、サン=ジル西ファサードの彫像の制作時期をその文書の時期 (1171-1186 年) と同一視し、12 世紀後半～終わり頃とする。この見解に賛成する研究者は多い。ただしブルヌスという名前は、当時のラングドックではありふれたものであって、その 2 つの協約文書に署名した人物と、サン=ジル西ファサードの彫像の制作者が同一人物であるとは限らないとする見方もある。当然のごとく、これはファサード制作時期を 12 世紀前半とする研究者に多い。なお、M. Aubert は、M. Gouron のブルヌスについての説を支持するが、サン=ジルの彫像が作られた時期を、その文書の年代よりも多少早めて 1160-1170 年としている。

A. Borg は、「1116 年の碑文」から最初の建設開始をその年とするが、その後で上部教会のプランが構想され、上部教会と西ファサードは 1150 年以後 (1160-1170 年頃) に建設されたと考える。ただしこの説を認めるなら、サン=ジルの西ファサードは、北フランスのサン=ドニやシャルトルの初期ゴシック彫刻 (1140-1150 年代) よりも遅れることになる。

1970年代になって「サン＝ジル論争」に新しい見解を加えたのは W. Stoddard であった。彼によれば、西ファサードの土台つまり地下クリプトの西壁は、1130年代には完成しており、その時期以降に横並びの三連式扉口や十二使徒像、そしてローマ円柱の列が、その土台の上に最初から計画されて西ファサードの建設が始まったとする。中央扉口の左右には、前に張り出すポーチを支えるために、2 本一組の二重円柱が立てられた。彼は西ファサードの工事においてはブリュイのペトルスらの異端に対抗するべく図像プログラムに変更が加えられたとする M. L. Colish の反異端図像説を受けて、1140年代（より正確にはペトルスが火刑に処せられた1145年頃以降）に当初の建設計画が変更され、3 つのタンパンとリントル、そして受難のフリーズが作られたとした。そしてこの中段のフリーズの連続性を遮らないように、ヴォールトの架かる中央のポーチは取りやめ、それを支えるはずであった 2 本一組の二重円柱だけが残され、今度はフリーズを支えるためにその台座（scole）が、ライオン彫刻の基壇などを組み込む形でかさ上げされたと考えた（中央扉口の独立二重円柱は純粋に装飾的要素として当初から現在の位置に意図されていたものであり、プラン変更の結果そこに残されたものなのではない、とする説もある）。W. Stoddard によれば、受難のフリーズの追加が 1140 年代半ばであるなら、西ファサードの完成は 1150 年代最初の頃である。彼はまた人物像の緻密な計測や衣服のヒダなどの様式の分析を行うことで、西ファサードの彫刻の制作者についても、それが少なくとも 5 人いたことを明らかにした（これについては後述）。

W. Stoddard が唱えたファサードの台座（scole）の部分的なかさ上げによる建設計画変更説には近年では批判的な見解も少なくない。ファサードの彫刻ブロックの組み方などに見られるわずかな不整合性のうちに「計画変更」を示すものを見出すことは難しいとも言われる。そして結局のところ、サン＝ジル修道院教会西ファサードの建設年代については、文字史料の欠如などもあって、残念なことに未だ確定的なことはまだはっきりしないというのが現状である。

この西ファサードは、地中海地域のロマネスクの代表的作品の 1 つであると言われる。スケールの大きな彫刻の施された 3 つの扉口を持つ大規模なもので、そうした例は南フランスでは唯一のものであろう。ただし規模の大きさにもかかわらず彫刻のプログラムにおいては全体の構成が不規則で、均質性や統一性に欠けるという見方から、それとは逆に、統一された秩序が明晰な意識によって精緻で複雑なヒエラルキーの上に構築されており、論理的な構造が看取できるとする見方までさまざまである。これは言うまでもなく制作年代やプロセスをめぐる議論と関連しており、ファサードに変則性や不規則性を認める見方は、制作工事が中断と再開を繰り返した結果であると言えよう。

古代との強い影響関係についてもさまざまな見解が提示されてきた。もっともオーソドックスなものは、サン＝ジルの西ファサードが古代ローマ時代の凱旋門、具体的にはオランジュの凱旋門から多くのインスピレーションを得ているというものである。代表的なのは V. Lassalle であろう。横並び三連式の扉口形式は、確かにオランジュの凱旋門とよく似ている。しかし古代凱旋門には前面に並ぶ列柱や、扉口の突出部（隅切り部分）に人物の彫像が並ぶということはない。A. Borg はサン＝ジルに見られるそれらの特徴が古代の凱旋門から影響を受けたものではなく、むしろオランジュやアルルの古代劇場の舞台背後の壁面装飾「スカエナエ・フロンス」

(*scaenae frons*) をモデルとしたものであると考えた(アルルのそれは現存しない)。今日ではサン=ジルの西ファサード形式を古代劇場の「スカエナエ・フロンス」と結びつける見方が多い(ただし凱旋門と古代劇場の両方の影響とする見方も少なくはない)。

古代からの影響はサン=ジルの彫刻装飾にも濃密に見出せる。人物像やその周囲に施されたモルディング、そして帯状パネルにおける幾何学的文様、植物文様などには古代建築(ニームやアルルなど)からの直接的な模倣も見られる。また古代末期にあたる初期キリスト教時代の石棺彫刻の伝統(特に4-5世紀のアルルのそれ)からテーマや技術を得ている。そこに主に見られるのはキリストのエルサレム入城から受難に至る新約のさまざまなテーマである(そのうちキリストのムチ打ちと磔刑については、初期キリスト教時代には珍しいものとされる)。サン=ジルの古代劇場の形式や石棺彫刻の芸術的要素など多くのものをアルルから受け取った。そしてその見返りに、今度はファサードの構造や彫像の様式などやはり多くのものをアルル(サン=トロフィーム)に投げ返したのだとも言えよう。

サン=ジルのわかれ目が目にするのは、しかしこうした古代的な芸術の単なる模倣にとどまるものではない。言うまでもなくそこに中世的・キリスト教的な解釈を基盤としたロマネスクの造形芸術の精神が(さらにまた北フランスで新しく興りつつあるゴシックの芸術も一部分取り入れながら)、見事に融合した一大モニュメントなのである。

古代的要素に対してとりわけ中世的なのは、ファサード中段の帯状フリーズと3つの扉口の上に架けられたタンパンであろう。M. L. Colish、W. Stoddard、A. Borgなどが言うように、キリストの生涯と受難を表したその部分が、反異端を意図する図像プログラムとして作られたとするなら、そこには言うまでもなく明確なキリスト教的(クリュニー的)主張が見て取れる。ロマネスク彫刻においては、「キリストの磔刑」(Crucifixion)を含むキリストの受難は非常に珍しい。W. Stoddardの言うように、西ファサード制作工事の途中で当初の計画をわざわざ変更してまで、古代的な彫像と列柱が並ぶその上に、あえて受難のテーマを堂々と掲げたのだとすれば、それはやはり反異端プロパガンダを意図した大々的なプロジェクトの結果であったと思われる。またA. Borgは、驚くべきことにサン=ジル西ファサードに、聖ジル本人の姿が見られないことを指摘する(アルルの場合はサン=トロフィーム教会扉口に聖トロフィームの彫像がある)。これもやはりサン=ジルの西ファサードが反異端プロパガンダを何よりも優先して作られた結果であると思われる。クリュニーの傘下であったサン=ジルの南フランスにおける異端の活動に対する最前線に立って、カトリック側の橋頭堡となっていたことを忘れてはならない。

しかしこのようにして西ファサードにおける反異端プロパガンダを認めるとするならば、少なくともフリーズとタンパンについては、異端者ブルユイのペトルスが火刑となった1130年代半ば頃以降に制作されたものであるとする説を認めないわけにはいかないであろう。ペトルスの死後もラングドックではカタリ派などの異端の活動は消えることがなく、よく言われるように、サン=ジルのファサードはそうした異端に対するカトリック側からのマニフェストなのであった。なお、かつてエミール・マールは、キリストの受難が中世ロマネスク芸術では非常に稀で、南フランスにいくつか例があるに過ぎないことから、12世紀初め頃のこの地域の芸術

家たちが、受難を中心に据えたキリスト伝の挿絵入り写本（いわゆるベアトウスの写本などの流れをくむ）を持っていたことは疑い得ないと主張している。

サン=ジルの西ファサードの図像プログラムについては、別の見方も存在する。すなわちそれが聖地に対する十字軍を顕彰する目的で作られたものであるとする見方である。その代表は C.A.Ferguson O'Meara で、彼女は 1977 年に出版された博士論文において、サン=ジルの南扉口タンパンに、天使がシナゴグ（イスラム教徒の聖所である「岩のドーム」）を打ち倒した図像があると指摘し、これは第 1 回十字軍におけるエルサレム占領を表したものであるとした。さらに彼女は北扉口の「エルサレム入城」を第 2 回十字軍とも結びつけている。こうした対イスラーム・プロパガンダは、何よりもサン=ジルがその傘下にあったクリュニー修道院の第 8 代修道院長・尊者ピエール（ペトルス・ヴェネラービリス）の十字軍を讃えようとする意向に沿うものであったとされる。しかしながらこの見解には異論も少なくない（D. Diemer など）。

次に西ファサードの制作者について見ておこう。制作年代についてと同様に、制作者についてもこれまでさまざまな見解が出されて議論されてきた。明らかであるのは、西ファサードに並ぶ彫像のうち、左の扉口と中央の扉口の間の左側の二人、すなわちマタイとバルトルマイ（図 4 左）を制作したのがブルヌス（Brunus [BR]）という彫刻師であったということである。彼はこの二人の使徒に自らのサイン（BRUNUS ME FECIT／ブルヌス、我を作れり）を残している。先に述べたように、このブルヌスは 1171 年と 1186 年の文書に署名人として現れるペトルス・ブルヌス（Petrus Brunus）と同一人物であるとされる（ただし異論もある）。ブルヌスが制作したマタイとバルトロマイは、古代の彫像に強く影響されており、シルエットが重く、厳しい。厚く折り重なった衣装を着ており、全体的に静的で動きに乏しい。しかし衣服のヒダなどの様子は非常に洗練されている。彼はこれ以外にも中央扉口の側面（隅切り）の左右に並ぶ福音書記者ヨハネ、大ヤコブ、パウロを制作したとされる（図 5 右）。このうちヨハネは福音書冒頭の「IN PRINCIPIO ERAT VERBUM／最初に言葉があった」が刻まれた書物を右手



30.3.6a（図 4）左からマタイ、バルトルマイ（BR）、トマス、小ヤコブ（TM）

に持っている。大ヤコブも開かれた書物を持っていて、そこには、あらゆる完全な賜物は上から下って来ることを意味するフレーズ「OMNE DATUM OPTIMUM ET ONUM PERFECTUM DES [URSUM EST [...]]」が記されている（ヤコブの手紙、第1章17）。このヤコブの顔は髪が肩まで長く伸び、衣服のヒダは風になびくように広がっている。パウロはブルヌスの偉大な作品の1つに数えられる。顔は損傷が少なく、禿げた額に長い髭と髪の毛が印象的である。力に満ちたその表情には内面的な強さを感じられる。フィラクテール（巻物、吹き出し）を持ち、そこには「GRATIA DEI SUM ID QUOD SUM／神の恵みによって我はあり」と刻まれている。

ファサードの彫像についてはブルヌスを含めて3人の彫刻師が関わっていると考えられたこともあるが、W. Stoddardによる詳細な研究によって、現在では少なくとも全部で5人の彫刻師が制作に携わったことが明らかになっている。ブルヌス以外の彫刻師は以下の通りである。

トマス・マスター（Tomas Master [TM]）、すなわち聖トマスの彫刻師で、トマス、小ヤコブ（図4右）、ペトロの彫像、中央扉口の基壇および右扉口の円柱の基壇の浅浮き彫りを制作した。アングレーム大聖堂のファサードの彫像と様式的に同系統と見られているので「アングレーム・マスター」とも呼ばれる（言い換えればプロヴァンス的ではない）。古代の伝統の中にあるブルヌスとはかなり異なり、その彫刻は線的・平板であるが動的でもある。トマスはまるでダンスをしているかのように脚を交差させている。小ヤコブはエルサレムの司教でもあったことから、司祭の服（ヒダがあまりない）を着て司教杖を持っている（杖自体はなくなっている）。像は左右の幅があり、トマスよりも重量感があり平面的である。光輪にヤコブの名が刻まれている。中央扉口基壇などの浅浮き彫りでは、人物の衣装のヒダは風を受け、マントが軽やかになびいている。ブルヌスよりも自由でダイナミックであり、いっそうロマネスク的であるとされる。中央扉口の左側面（隅切り）で獰猛なライオンの上に立つペトロは、筋の浮き出た手をしており、左手で鍵を持っている（図5左）。ダイヤ柄の金細工装飾の付いたテュニ



30.3.6a (図5) 中央扉口の隅切り

左からヨハネ (BR)、ペトロ (TM)、大ヤコブ、パウロ (BR)



30.3.6a (図6) 使徒 A、B (SM)、C、D (HM)。

ック（司祭服）を着ている。大きな目がはっきり残り、カールした髪の毛とひげが認められる。

ソフト・マスター（Soft Master [SM]）。別名「マギの工匠」などとも言われる。ファサード右手壁面の具体的な名前が分からない2人の使徒像（図6左）、左（北）扉口のタンパン（マギの礼拝）、リンテル、側面（キリストのエルサレム入城）、そして中央扉口側面の「ペトロの否認の予言」などを制作したとされる。古代彫刻との親和性においてブルヌスと近い。しかしその造形はより繊細で、衣服のヒダは柔らかく、ぴったりとしていて潤いがある。使徒像では中央扉口のすぐ左側の使徒の表情が豊かで柔らかく、それでいて高貴である。その右隣の使徒は衣服の下で脚を交差させている。全体的に彼の作品はローマ的な造形術をよく体得していて、初期キリスト教時代の石棺彫刻も学んでいるとされる。イル＝ドゥ＝フランス出身でシャルトルやパリのノートルダム・デ・ラ・ヌーヴの聖アンナの扉口からインスピレーションを得ているとも言われる。

ハード・マスター（Hard Master [HM]）。右（南）扉口のタンパンの「キリストの磔刑」とリンテルの「キリストの復活」、そして南扉口のすぐ左隣の名前の分からない2人の使徒（図6右）を制作したとされる。別名「磔刑の工匠」とも呼ばれる。ソフト・マスターに比べると像は静的で、古代的である。人物たちの衣服の布地は厚くて硬い。2人の使徒の衣類のヒダも重たくヴォリューム感がある。右端の使徒の胸では衣服が丸く渦巻いている。リンテルやフリーズにおける人物たちにも重々しさが感じられる。

最後はミカエル・マスター、すなわち大天使ミカエルの彫刻師（Michael Master）である。西ファサードの一番左側にいる天使ミカエルとファサード右端の3人の大天使、そして中央扉口およびその左右に連続する受難のフリーズと隅切り（側面）の多くの部分を制作したとされる。この彫刻師には、最初のブルヌスに次ぐ、あるいはそれ以上の才能が認められ、多くの研究者たちから最大級の賛辞が送られている。とりわけ左端にいるドラゴンを踏みつける大天使ミカエル（図7）は、サン＝ジールにおける最高傑作であるとも言われる。ダイナミックで情熱的

な躍動感と力強さがあり、それが彫刻に生命の活力と主張の一貫性を与えている。ミカエルは強い意志をその四角い顔の表情に感じさせながら、頭と胸を躍動的に傾けている。そして打ち倒したドラゴンの喉に槍を突き立て、その左足を長く延ばしてドラゴンの首を踏みつけている。ファサード右側の三人の天使像などにはブルゴーニュからの影響を指摘する研究者もいるが、少なくともミカエルについては12世紀のプロヴァンス・ロマネスクでしか見られない表現の豊かさが見られるとされる。また受難のフリーズには、洗練された節度のうちにもドラマチックな力強さを感じられる。さらに中央扉口の上のタンパン（栄光のキリスト、あるいは最後の審判と4つの生き物）も、もともとはこの彫刻師が制作したものではないと言われるが、残念なことに現在そこにあるのは17世紀に置き換えられた無残な修復物である。この彫刻師ミカエル・マスターの出自につ



30.3.6a (図7) 大天使ミカエル (MM)

いては、ブルゴーニュから来たとする説、あるいはここサン＝ジルにおいてソフト・マスターやハード・マスターのもとで修行を積んだとする説など、やはり意見が分かれている。

なお最新の研究の中には、W. Stoddardによる制作者の区別・同定はすでに過去のものであって、単純に彫刻師（あるいはそのアトリエ）の個別的な同定はできないとする主張もある。5人以上に、はるかに多い制作者の手がそこに加わって、複雑な全体を作り上げているのではないかとする見方もある。まことにサン＝ジルの西ファサードは、さまざまな問題を現在に至るまで提起し続けているのである。

次にサン＝ジル修道院教会の各部分について、簡単にではあるが順に見てゆくことにしよう。

西ファサードがあるのは、地下クリプト（下部教会）の西壁のほぼ真上にあたる。宗教戦争や大革命によって上部教会がかなり破壊されたこともあって、この西ファサードのうち今日にまで残っているのは、建設当時の下半分にあたる3つの扉口が並ぶ部分と、現在の上部教会の主身廊西壁の上の部分、そしてファサードの向かって左側の小塔と右側の鐘塔のみである。主身廊西壁の南北両側には、かつては側廊に対応する形で丸窓の開けられた西壁が、南北の扉口の上にそれぞれ作られていたと思われる。西ファサードの前の大きな石段は19世紀のものである。それ以前には17世紀に作られた半円形の階段があった。

幾重にも重ねられた半円形アーキヴォルトの架かる中央の扉口と、その左右にそれよりも小さな同形の扉口が横に並ぶ様子は、すでに述べたように、かつては同じく三連式となった古代の凱旋門、とりわけオランジュの凱旋門との影響関係が指摘されてきたが、先にも述べたように、今日ではそのモデルを古代劇場のスカエナエ・フロンスとする説が有力となっている。こ

の西ファサードは4つの層からなる。最上部には3つのタンパン、そのすぐ下には水平にのびるフリーズ、さらにその下には使徒や天使の彫像と円柱がずらりと並び、一番下にはそれらの彫像と円柱列を支える台座（基壇）がある。

3つの扉口の上にあるタンパンは、それぞれ一番外側にパールとビエット文様が連なるアーキヴォルトの中に組み込まれている。そのテーマは左（北）側から順に「マギ（東方の三博士）の礼拝」「栄光（荘厳）のキリスト」「キリストの磔刑」である。「マギの礼拝」は、この近くで現存するものではモンフラン（Montfrin [30.2.19]）のタンパンが知られるが、サン＝ジェルではよりいっそう自然であり、それでいて高貴なものである（図8）。ソフト・マスターの作品とされる。ただし残念なことに登場する人物は天使も含めてすべて頭部が破壊されてしまっている。タンパンの画面は2本の小円柱によって3つのパネル（区画）に分けられる。中央には、左膝の上に幼子イエスを載せた聖母マリアが椅子に座ってこちらを向いている。イエスは左手をマギの方に向けて祝福している。馬杉（2001）は、円柱で仕切られて聖別化された特権的な場所でこちらを向いている聖母子像は、側面的に横並びに聖母子とマギを並べるそれまでのやり方から、聖母崇拜による礼拝像化へと向かうプロセス（それはシャルトル大聖堂西ファサード右扉口に至る）を示しているのだとしている。



30.3.6a (図8) 左（北）扉口のタンパンとリンテル（SM）

このタンパンの左側のパネルにいる3人のマギは、それぞれ精巧な捧げ物を持っている。右側の2人は動きがダイナミックで、そのうち手前のマギは脚を曲げてひざまずき、後ろのマギは左手を大きく上げて空に輝いているであろう星を指さしている。かつてエミール・マールは、このマギの構図が典礼劇（降誕劇）の影響によるものであると考えた。右側のパネルは「ヨセフの夢」である。タンパンのヴシュールに沿って羽を広げながら空から下りてきた天使は、左手で天を指し示し、右手には神から示されたエジプト逃避のメッセージ（吹き流し）をヨセフに伝えている。そのヨセフは方形の小さな椅子に座り、驚きのポーズを取っているが、そこに

は同時に思慮深さも表されていると言われる。

中央扉口の上のタンパンには、左右のタンパンよりもいっそう大きなアーキヴォルトが架かる。一番外側のヴシュールは、南北両側のタンパンのそれと同じ装飾帯であるが、中央のものは両端において左右にコーニスとなって延びており（パルメットと花卉の連なりが彫刻されている）、さらにそこにはコーニスを支えるモディオンも並んでいる。それらのモディオンには、大きな羽を持つ鳥、モンスター、ウシ、オランスらしき人間、アカンサスなどが彫刻されている。この中央のタンパンのテーマは黙示録にある「栄光のキリスト」で、丸いマンドーラの中にあって渦を巻く雲に囲まれて虹に座るキリストが、4人の福音書記者を表す生き物に囲まれている。このタンパンには、かつては「最後の審判」があったとされるが、16世紀の宗教戦争の際に破壊され、1650年頃にまずいやり方で再建された。ただし左下のライオンだけは再建以前のものであるとも言われる。



30.3.6a (図9) 右(南)扉口のタンパンとリンテル(HM)

右(南)側のタンパンは「キリストの磔刑」(Crucifixion)である(図9)。そのうち中央および右側のブロックはハード・マスターの手によるものとされる。ロマネスクのタンパンに「磔刑図」が現れるのは珍しく、この近くでは、エロー県のサン＝ポン＝ドゥ＝トミエール(St-Pons-de-Thomières)、アルデッシュ県のシャンパーニュ(Champagne)、ドローム県のディー(Die)、そしてローヌ県のコンドリュウ(Condrieu)に見られるくらいである。先にも触れたように、M. L. Colish、W. Stoddard、A. Borgなど多くの研究者が、サン＝ジルのタンパンの磔刑図は、ブリュイのペトルスなどの異端に対抗するためのカトリック側(クリュニー側)からのプロパガンダであったと考えている。しかしC.A.Ferguson O'Mearaのように、それが反イスラムの立場から十字軍を顕彰したものであるとする見方もある。J. F. Scottも、反異端図像説に反対している。

タンパンの中央には、大きな十字架に磔にされたキリストがいる。浮き出るあばら骨など、その人体表現はリアルである。十字架の横木（つまりキリストの左右の腕）の上には、向かって左側に太陽、右側に月を表す人像がある。十字架の下には左側に聖母、右側にはヨハネが立っている（ただし破損が激しい）。聖母のさらに左側にはカトリック教会（エクレシア）を表す女性が立っている。彼女は小さな孔の開けられた幾何学紋様のドレスを着ている。東方（ビザンティン風）の衣装であろうか。大きく破損しているが、勝利の旗を持っていたと思われる。旗の一部がヴシュール左上に残されているのが認められる。タンパンの一番左側には、キリストを賛美する2人のローマ兵がいる（一人は百人隊長で、椅子に座っている）。「本当に、この人は神の子だった」（マタイ、第27章54）と言っている様子である。

このタンパンの右側には、大きく羽を広げた天使によって打ち倒される女がいる。彼女は湾曲した長い襜の衣装を着込んでおり、その頭からは円形の2階建てドームのような形をした大きな冠がずり落ちている。この敗北の女はシナゴグ（古いエルサレムのシンボル）を表しているとされる。この図像が反異端プロパガンダであるとする立場からは、これが異端に対する（そしてもちろんユダヤ教会に対する）カトリック教会の正当性を表現したものと考えるが、一方でこのタンパンを十字軍顕彰のためのものだと考える立場によれば、この落下する大きな冠はイスラームに占領されているエルサレムのシンボル・岩のドームであり、十字軍によるエルサレム（あるいはそこにある岩のドーム）の奪還を表現したものである。こうした反イスラーム的図像は、とりわけクリュニー的な十字軍推進思想がその背景にあると類推されようけれども、サン=ジルのタンパンの場合は、西ファサード全体の図像プログラムの構成を考え合わせるならば、やはり反異端プロパガンダを意図したものであると考えるのが自然なことに思われる。

3つのタンパンの下には、パール、ピルエット、パルメットの連なるコーニスが巡り、その下に彫刻の施されたリンテルとフリーズが水平の帯状に連なっている。とりわけ中央の扉口の上に載るリンテルとそこから左右に延びるフリーズは、前面に打ち出された壮大なエンタブラチュアを形づくっている（フォションによれば「擬」エンタブラチュア）。左右のタンパンは中央のタンパンよりも一段低い位置にあるため、それらのタンパンの下にあるリンテルも、中央のそれよりは一段低い位置に作られている。サン=ジルにおけるこのリンテル・フリーズの彫刻（いわゆる「受難のフリーズ」）の内容は、福音書における神学的ストーリーに照らし合わせた時に、しばしば全体として多くの不整合と不規則性を合わせ持つものと指摘されている。これはリンテル・フリーズの制作過程において図像プログラムの計画変更などによって生じたものであり、あるいは別の場所にあった彫刻をそうした変更の際に転用したことによるのだとも言われる。中央および左右のリンテルはどれもその下面には、例えばニームのメゾン・カレ側面上部のフリーズのような古代風の美しいランソー（唐草文様）が彫刻されている。

左（北）側のリンテルのテーマは「エルサレム入城」である（図8）。受難を形づくる諸場面の最初のもので、ソフト・マスターの作品とされる。様式としては初期キリスト教時代の石棺の影響が強いが、そこにロマネスク的な技巧が加えられたものである。場面はリンテルの左側の

柱の上の「エルサレム入城の準備」から始まる。杭から放たれるロバの顔がリアルである。リンテル部分での情景では、ロバに乗ったキリストを先頭にして使徒たちの行列（古代風の衣装を着てシュロ、書物、巻物を持った弟子たち）が進む。キリストの後ろの弟子たちは前かがみになっている。これら行列の人物たちの姿勢や衣装の様子は非常に写実的である。右端には、エルサレムの住民たちがシュロの葉を持ってキリスト一行を迎えている。彼らのうちの2人は、自らの衣服を地面に広げており、他の者たちはヤシの木の上に登ってその枝葉を切っている。一番右端には城壁と塔を持つエルサレムの街があり、その中央には寺院らしき3階建ての丸い建物がある。リンテル右側の隅切り〔側面〕部分には、やはりシュロの葉を持って歓喜してキリストを迎えるエルサレムの住民たちがいる。彼らの一番左端には小さな子供がシュロの木にしがみついて、その枝を切り離そうとしている。破壊を免れたその顔は、ふっくらとしていてユーモラスでさえある。彼らの右端には若者に手を引かれる人物がいる。キリストに会って病を癒やしてもらおうとする盲人であらうか（マタイ、第11章）。

中央扉口のタンパンの左側に延びるフリーズは、まず「ユダに金を支払うカイアファ」である。ロマネスク彫刻としては珍しいものである。中央には大祭司カイアファ（Caïphe／Kaiaphas）が椅子に座って、2人の臣下に引き連れられてきたユダに尊大な態度で30ドゥニエを支払っている。左端には2人のユダヤ人らしき人物がいて、裏切りの値段を相談しているようである。「神殿から商人たちを追い払うキリスト」（神殿浄化）はミカエル・マスターの手によるものとされる。左端のキリスト（その頭には十字のついた光輪がある）は、前かがみになりながら商人たちを（その一人の肩に左手を置いて）神殿から押し出している。牛や羊が商人たちと共に追い立てられているが、左端の牛は鼻の穴を広げ、目を大きく剥いている。続いて「ベタニアでのラザロの復活」であるが、この場面は、中央扉口の両側に張り出している二重円柱の柱頭とその大きな冠板の背後にあるために、下からだと非常に見えにくい。ラザロが登場するのはプロヴァンスの伝統を反映したものとされる。

中央タンパンの下の方の側面（隅切り部分）のフリーズには、ソフト・マスターによる「ペトロの否認」がある。ここにも初期キリスト教時代の石棺の影響が見られる。左には椅子に座った使徒たちがおり、右側にペトロとキリストがやはり椅子に座って向かい合っている。ペトロの足下には鶏がいる。ペトロはこの鶏が鳴く前に、3度キリストのことを知らないと否認したのであった。

中央扉口のリンテルは、古代的な3本の縦溝のつけられたトリュモー（中央柱）と、同様の縦溝がつけられた左右両側の側柱（柱頭には大きくて立派なワシ）の上に載せられており、そのテーマは「最後の晩餐」（La Cène）である（図10）。リンテルやタンパンに彫刻された同じテーマは、この近くではボーケール（ガール県）、シャンパーニュ（アルデッシュ県）、ティヌ（Thines／アルデッシュ県）、またここから離れた所ではオーヴェルニュのシャルリュ（Charlieu／ロワール県）、ブルゴーニュのディジョン（Dijon／コート・ドール県）にあったサン＝ベニーニュ修道院（現在は隣接の考古学博物館に展示）、そしてイタリアのモデナ大聖堂（Duomo di Modena）などに見られる。サン＝ジルのものは、ハード・マスターの手によるものとされ、他に比べて写実的で優雅な作品であると言われる。テーブルクロスやその下に見える



30.3.6a（図 10） 中央扉ロリンテルの「最後の晩餐」（HM）

使徒たちの足もとなどがリアルである。キリストの胸にはヨハネがもたれかかっており、キリストはその頭越しに右手でユダにパン切れを差し出している。サン＝ジルのこの「最後の晩餐」は全体的に損傷が激しく（特に人物たちの頭部）、その意味では例えばボーケールのフリーズなどの方が整った様子を示している。

このリンテルの左端には「弟子の足を洗うキリスト」がある。キリストはすぐ後ろにある柱に着物を置き、腰に布を巻いて前にかがんでペトロの足をつかんでいる。ペトロは左手で自らの頭を指さして、髪の毛も洗って欲しいとキリストに伝えている。エミール・マールはこれをブルゴーニュ派の作品であるとしている。なお「最後の晩餐」を中心とするこのリンテルの彫刻は、近代になって上部教会のジュベ（身廊と聖歌隊席の間の仕切り壁）から移されてはめ込まれたものであるとの仮説もあるようであるが、これは西ファサード全体の構成を考えるなら支持することはできないであろう。

中央扉ロリンテルの右側面（隅切り部分）には、「キリストの逮捕」と「ユダの接吻」がある。ミカエル・マスターの手による。このフリーズは宗教戦争の際の破壊をなぜか免れたもので、キリストをはじめ登場人物たちの表情が非常にリアルである。左端にはマルコスの耳を切り落とすペトロのシーンがある。右側の「ユダの接吻」（図 11）では、キリストとユダは2人のローマ兵に挟まれているが、そのうちの一人（向かって右側）は今にも剣を抜こうとしている。

この隅切り部分から「3人の兵士」の小パネルを経てさらに右側に続くフリーズには、ミカエル・マスターの手による「ピラトの前のキリスト」「キリストのムチ打ち」「十字架の道行き」が並ぶ。このうち「キリストのムチ打ち」「十字架の道行き」はボーケールのものを除いて、ロマネスク彫刻では比較的珍しいものである。「ピラトの前のキリスト」は中央扉口の二重円柱の張り出しによって見にくい位置にある。両手を縛られたキリストが、3人の兵士によって、尊大な



30.3.6a（図 11）ユダの接吻（MM）

姿勢で椅子に座るピラトの前に引き立てられている。「キリストのムチ打ち」(図 12)は、上半身裸のキリストが円柱に両手を縛られ(その手の表現はリアルである)、前にぐったりと崩れ落ちるようにして、2人の男にムチ打たれている。今にもムチを打つ痛々しい音が聞こえてきそうな情景と言える。その右側の「十字架の道行き」(十字架を背負うキリスト/ヴィア・ドロローサ)は、キリストを含めて全部で4人の人物がいるが、残念なことに非常に破損が進んでおり、おおよその姿勢しか見て取れない。ムチ打ちの場面ほど鮮明ではないけれども、大きな十字架を持つキリストのリアルな「手」が印象的である。なおヨハネ以外の福音書では、この十字架を背負うのは途中からキリストに代わってキレネのシモンになったとされている。



30.3.6a (図 12) キリストのムチ打ち (MM)



30.3.6a (図 13) ベタニアのキリスト (MM)

右(南)扉口のフリーズは、先にも触れたように、中央扉口のそれよりも一段低い位置に巡らされている。そのうち左右の隅切り部の端にある彫刻は、扉口の前面に立つ大きな円柱の柱頭の後ろに隠れて見にくい場所にある。左端のものはミカエル・マスターによる「エマオの弟子たち」で、キリストの刑死の後、エルサレムを逃れた2人の弟子がエマオに向かう途中でキリストに出会うというエピソードである(ルカ、第24章)。このフリーズは破壊を免れて非常に保存状態がよく、キリストの顔がはっきりと残されている。キリストはあたかも巡礼のように杖を持ち、帽子を被っている。そのすぐ右隣には「キリストとマグダラのマリア」が続く。いわゆる「我に触れるな」(ノリ・メ・タンゲレ/ヨハネ、第20章)とされる。キリストは右手に十字架を持ち、ヴェールを被ったマグダラのマリアは椅子に座って右手を挙げている。しかしこのエピソードでマリアが椅子に座るとするのは異例な構図である。別の場面を表したパネルがここに転用された可能性が指摘されている。さらにその右側、つまり南扉口のリンテルの左側面(隅切り)には、同じくミカエル・マスターの手による「ベタニアのキリスト」(図 13)がある。一人の女性がキリストの足下にひざまずいて、自分の髪の毛でキリストの左足をぬぐっている。ヨハネの福音書第12章あるいはルカの福音書第7章にあるエピソードである。サン=ジルにおけるこの図像はしばしば「キリストの前にひざまずくマグダラのマリア」とされるが、ここに登場するマリアはマグダラのマリアとは別人ではないかとも言われている。

続く南扉口のリンテルは、一連のキリストの受難の続きで、キリストの復活に関わるテーマ

を扱っている。ハード・マスターの作品とされる。左側は「香料を買う聖女たち」（図 9）で、2 人の香料商人が店のカウンターに座って、天秤で香料の重さを量っている。香料商人と聖女たちのやりとりのシーンはアルルやボーケール、そしてモデナにも見られるものであるが、エミール・マールによると、これは例えば復活祭の朝のミサなどに演じられた中世の聖史劇・典礼劇から題材を取ったものであるという。また **Ferguson O'Meara** は、サン=ジールにおいては、このシーンがここに拠点を置いていた聖ヨハネ病院騎士団の活動（あるいはこの騎士団における薬剤師の役割など）と関わりがあると考えている。

リンテルの中央から右側にかけては、同じくハード・マスターの手による「キリストの墓を訪れる聖女たち」が置かれている（図 9）。これもまた初期キリスト教時代の石棺彫刻の影響が認められるものである。3 人の聖女たちがそれぞれ香料の入った壺を持ってキリストの墓に近づく。パネルの左右両端では兵士たちが眠り込んでいる。また墓の右側には、ビザンツ風の衣装を着て左右に大きく羽を広げた天使が、左手には杖を持ち、右手で天を指さしている。墓（石棺）の中からは、キリストを包んでいたであろう屍衣が外に垂れ下がっていて、キリストが復活したことを暗示している。

南扉口のリンテルの向かって右側隅切りのフリーズは、やはりハード・マスターの作品であるとされる。3 人の聖女たちが弟子たちに、キリストの復活を知らせる場面があり、先頭の聖女が左手で天を指さしている。角部で椅子に座るのはペトロであろうか（それをキリストとする見方もある）。さらにその外側には、キリストが弟子の前に姿を現して右手で祝福を与えながら自らの復活を告げている。

中央扉口の左右のフリーズのすぐ下には、彫刻の施されたコーニスが延びている（ファサードの左右の両端部のコーニスも同じ）。それらの彫刻は、パルメットやギリシア風雷文とともに、さまざまな表情を浮かべる人間、ライオンその他の奇妙な四足獣、ウシ、ドラゴン、ヘビなどである。まるで奇怪ワールドの一覧展示のごとくである。それらのコーニスの下面には、古代風の大きなロザス（花卉）が並んでいる。

コーニスの下は、ランソー（アカンサスなどの唐草文様）の彫刻されたフリーズ帯が巡り、さらにその下には、縦溝付きのピラストルで分けられたニッチの中に収まる 12 人の使徒たちの高浮彫りの彫像が、やはり古代風の縦溝付きの台座の上に並んでいる。ファサード両端には大天使がいる。中央扉口の両側面（隅切り）では 2 人一組となって相對している。これらの彫像を、向かって左端から右端へと順に記すと以下の通りである。大天使ミカエル（MM）、マタイ（BR）、バルトロマイ（BR）、トマス（TM）、小ヤコブ（TM）、ヨハネ（BR）、ペトロ（TM）、大ヤコブ（BR）、パウロ（BR）、使徒 A（SM）、使徒 B（SM）、使徒 C（HM）、使徒 D（HM）、デーモンと戦う 3 人の大天使たち（MM）。略号は W. Stoddard によって同定された制作者を表す（BR：ブルヌス、TM：トマス・マスター、HM：ハード・マスター、SM：ソフト・マスター、MM：ミカエル・マスター）。ただし近年では、W. Stoddard によるこの同定について、単純に彫刻師の個別的な同定はできず、さまざまな制作者の手がそこに複雑に加わっているのではないかとする意見もある。中央扉口と南扉口の間に並ぶ 4 人の使徒（A～D）については、正確な同定が困難である。いずれにしてもこれらの使徒像は、特に異端に

対して一種の人像柱として教会（建築物としてのそれとともに組織としてのカトリック教会）を支える役割を果たしているのだと言えよう。なおこれらの彫像の大まかな特徴については、先にその制作者について触れた際に、すでに述べておいたのであらためて繰り返さない。

使徒たちの像は、古代風に縦溝が彫られた高さのある基壇の上に立っているが（その基壇自体はさらに無装飾の土台の上にある）、その基壇と彫像の間には、オーヴ模様のモールディング、無装飾のブロック、ギリシア風雷文とパルメットが水平に連らなっている。中央扉口の左右の出張り（二重円柱が立つ）の下段もまた同じ仕様である。なお、この中央扉口の左右の隅切り部の前面（つまり相対する2人の使徒の背後の角柱、二重円柱の後ろ側）には、それぞれ非常に見事なランソー（唐草文様）が彫刻されている。よく見るとその中にはウサギや小鳥がいるのが見える。

西ファサードの前面には、円柱が並び、3つの扉口を有機的に連結する役割を果たしている。左右の最前面には大きな円柱が、そして南北の扉口の左右両側にそれぞれ小円柱が立ち、さらに中央扉口の左右両側には、前に張り出す形で高い台座の上に載った2本1組の二重円柱が立てられている。

最前面に並べられた6本の大円柱は古代のものの再利用（ただし左から2本目の円柱は部分的に19世紀に再建）で、微妙に異なる高さの違いは、新たに設けられた基壇やライオンの彫刻の台座によって調整されている。柱頭には古代風アカンサスの葉飾りや人物などが彫刻されている。中央扉口と南扉口のちょうど中間（ファサードの右から3番目）に立つ大円柱の柱頭には、アカンサスの葉飾りの上に、天使（羽を持っている）がいて、その上のフリーズ・パネルを支えるようにして両手を捧げ上げ、大きな目でこちらをまなざしている。カールした丸い巻き毛が頭に並んでいるのが印象的である（図14）。左（北）扉口の外側の円柱は、2頭1組となったうずくまるライオンの台座の上に立てられている。内側の小円柱の台座は、左側ではライオンらしき四足獣が人間を引き裂き、右側ではロバ（あるいはヤギ）らしき動物がライオンに戦いを挑むようにして接している。



30.3.6a (図14) 巻き毛の天使

中央扉口の左右の張り出し部分は、それぞれ高さのある方形の基壇の上にさらに台座が置かれ、その上に2本1組の二重円柱（19世紀に修復）が立っている。この二重円柱の上には何も載っていない。元々はその上にポーチが作られるはずであったが、その後の計画変更によって円柱だけが残されたとする見方が多い。この円柱が立つ台座には、サル、ラクダ、ライオンその他さまざまな形象が彫刻されている。左に立つ二重円柱の基壇の外側には、ギリシア風雷文の帯の上に2匹のサルが3条線のツル紐にくくられて捕らわれており、その後ろにはラクダがいる（あばら骨が浮き出ている）。こうしたエキゾチックなテーマは、北アフリカあたりから来た商人がここサン＝ジルでも見られたからであろうか。同じく左側の二重円柱の基壇の内側

は傷ついたライオンと2人の狩人の戦いである。一方、右側に立つ二重円柱の基壇に目を向けると、北側には椅子に座って堅琴（チター）を弾くダヴィデと羊の群れが彫刻されている（ダヴィデの後ろには羽を広げた天使が立っている）。ダヴィデはもとは羊飼いで堅琴の演奏が上手であったとされる。南側はゴリアテの首を切り取るダヴィデである（図15）。ダヴィデは前かがみになって地面に横たわったゴリアテの首に剣を刺している。



30.3.6a (図15) 二重円柱基壇
ダヴィデとゴリアテ



30.3.6a (図16) 中央扉口隅切り（右側）

中央扉口の左右の隅切り（側面）には、先に触れたように使徒が2人ずつ並んでいるが、彼らが立つ台座には、あたかも使徒たちに踏みつけられるようにして獐猛なライオンが彫刻されている。邪悪に対する信仰の勝利である。しかしメリメによれば、ライオンは邪悪ではなくむしろ背教と戦う教会を表しているのだとする見方もあるという。向かって右側隅切りの、大ヤコブとパウロの下にいるライオンは、恐ろしい顔をして、人間と羊を襲っており、とりわけ大ヤコブの下にライオンは、鋭いかぎ爪を人間の背中に食い込ませ、その腕に噛みついて（図16）。メリメが紹介する見方に従うなら、そのライオンはカトリック教会（あるいは神によって遣わされた使者）で、襲われる人間はさしずめ異端者かイスラーム教徒ということになるであろうか。

同じこの中央扉口の隅切りの一番下の基壇は、左右ともにトマス・マスターの作品とされる。向かって左側のテーマは、初期キリスト教時代の石棺彫刻にもしばしば登場する「カインとアベル」である。南面は「カインとアベルの供犠（奉献）」（図17）で、縦筋の付けられた柱と半円アーチからなる枠が2つ並び、右側の枠の中ではカインが麦の穂を捧げ、左側の枠の中ではアベルが子羊を捧げている。空の雲の中から差し出された神の手はアベルの捧げ物である子羊に向けられている。二人の姿勢はヒザを曲げてまるでダンスを踊っているかのようで、マントはひるがえり、衣のヒダは左右でシンメト



30.3.6a (図17) カインとアベルの供犠

リックである。また捧げ物を持つ二人の腕には薄い布が架けられており、エミール・マールによれば、これはオリエンタ的なポーズであるという。同様の図像はニームのノートル＝ダム＝エ＝サン＝カストール大聖堂 [30.3.1a] の西ファサード上辺のフリーズに見られる。なおサン＝ジルにおいては、カインの背後には悪魔が、アベルの背後には天使がいる。それに続いて中央扉口隅切りの基壇西面（前面）には、「アベルの殺害」がある。やはり激しい動きを感じさせる作品で、カインは、木につかまるアベルの髪をつかんで背後にのけぞらせながら、ナイフでその喉を掻き切ろうとしている。摩耗していて分かりにくいですが、カインの肩には悪魔がいる。

中央扉口の隅切りの向かって右側の基壇に目を向けると、外側（すなわち二重円柱の下）の堅琴を弾くダヴィデのさらに下）では、中央に穴の空いたダイヤ柄の連続する 2 つの円形の輪が交差しており、その右側の輪の中には、立ち上がりながら小さな子ライオンに哺乳する雌ライオンがいる。左側の輪の中にいるのはライオンの口を引き裂くサムソンとされるが、かなり摩耗していて判別が難しい。中央扉口右側に隣接する内側の基壇（大ヤコブとパウロの彫像の下にあたる）では、今度はパール・エ・パ



30.3.6a (図 18) ケンタウロス (TM)

リエット装飾の 2 つの大きな輪が交差し、右側の輪の中には角の生えた大きな鹿、そして左側の輪の中には、その鹿に向けて矢を放とうとするケンタウロスがいる（図 18）。古代芸術からインスピレーションを受けた狩りのテーマで、トマス・マスターの作品とされる。ケンタウロスは、南フランスではヴァランス (Valence)、ディー (Die)、トゥールーズ (Toulouse)、また遠くではブルゴーニュのサン＝パリーズ＝ル＝シャテル (Saint-Parize-le-Châtel)、オーヴェルニュのシャルリュウヤスヴィニー (Souvigny) などに、さらにはパリのクリュニー美術館所蔵の象牙細工にも見られるものである。

西ファサードの左扉口では左右の小円柱はライオンの台座の上に立っていた。しかし右（南）扉口はそれとは異なる仕様となっている。向かって左側の小円柱の台座では、その角部 3 ヶ所に、柱礎（トールス）を支えるようにして後ろ足で立つ 3 頭のクマらしき動物がいて、その動物の間には人間がうずくまっているのが見える。一方右側の小円柱が立つ台座には、やはり角部に 3 人のアトラスのような人物がいて、まるでアクロバットのように体を大きく曲げて柱礎を支えており、W. Stoddard によればこれは一種の男像柱である。そのマントは中央扉口隅切りのカインとアベルのように、風にひるがえっている。これもまたトマス・マスターの作品とされる。しかし残念なことにその男像の表情は摩耗していてよく分からない。

ここまで見てきたサン＝ジルの西ファサードを中心とした彫刻群は、同じラングドックは言うに及ばず、プロヴァンスや遠くはイタリアにまで広い範囲で大きな影響を与えてきた。主なものを挙げるだけでも、ラングドックではボーケールのノートル＝ダム・デ・ポミエ（東壁のフリーズ / Notre-Dame-des-Pommiers de Beaucaire [30.3.3b] / ガール県）やサン＝ギレーム＝

ル＝デゼール修道院（Abbaye de Saint-Guilhem-le-Désert／エロー県）、モンペリエのノートル＝ダム＝デ＝ターブル（Notre-Dame-des-Tables, Montpellier／エロー県、現存せず）、フォンフロワ修道院（聖母像／la Vierge de Fontfroide／オード県）など。プロヴァンスでは直接の影響をアルルのサン＝トロフィームのファサードとクロワトルに与えた。またローヌを北へ向かって、サン＝ジルの彫刻と何らかの関係があると思われるのは、アヴィニョンのノートル＝ダム＝デ＝ドム大聖堂（クロワトルの柱頭彫刻／Cathédrale Notre-Dame-des-Doms, Avignon）、サン＝ロマン＝シュル＝イゼールのサン＝バルナール・コレジアル教会（西ファサードの扉口／Collégiale Saint-Barnard, Saint-Roman-sur-Isères [26.1.21]／ドローム県）、ヴァランスのサン＝タポリネール大聖堂（南扉口／Cathédrale Saint-Apollinaire, Valence [26.2.5a]／ドローム県）、シャンパーニュのサン＝ピエール教会（西ファサード扉口のタンパン／Saint-Pierre, Champagne／アルデッシュ県）、ティヌのノートル＝ダム教会（西扉口／Église romane Notre-Dame de Thines／アルデッシュ県）、コンドリュウのサン＝テティエンヌ教会（ファサード扉口のタンパン／Église Saint-Étienne de Condrieu,／ローヌ県）、またそれほど明瞭な関連ではないがヴィエンヌのサン＝モーリス大聖堂（西ファサードの扉口あるいは身廊のアーケード彫刻／Cathédrale Saint-Maurice de Vienne／イゼール県）など。またイタリアではモデナ大聖堂（Duomo di Modena）の内陣障壁、そしてスペインではシロス修道院（Monasterio de Santo Domingo de Silos）のクロワトルの柱頭彫刻にも影響を及ぼしたと言われる。

次に、サン＝ジル修道院教会の、西ファサード以外の部分についてもごく簡単にではあるが触れておきたい。

まず下部教会である。通常、地下クリプトとも呼ばれる（以下「クリプト」とする）。12世紀の建設以来ほとんど無傷で残っており、フランスで最も大きくて美しいクリプト、あるいは中世建築の技術的偉業であるとさえ言われる（図 19、20）。数多くの巡礼を受け入れる必要からその規模は大きく、長さは約 50 メートル、幅は約 25 メートルある。中央の主身廊と南北両側の側廊からなり、上部教会の 6 つのベイに対応している。またその西壁は、上部教会の西ファサードの基礎部分にあたる。最も古い部分は第 4 ベイに位置する「コンフェッション」

（confession）と呼ばれる聖ジルの墓で、これはウルバヌス 2 世が聖別した 1096 年以前にはすでにあったようである。この墓は 16 世紀の宗教戦争以降は埋もれてしまっていたが、1865 年に再発見され、その際にこの墓のベイの床面が約 2 メートル掘り下げられている。クリプト全体の建設プロセスについては、これもまた西ファサードと同じくさまざまな議論が行われてきた。すでに触れた上部教会南壁の 1 番目の扶壁の下に埋め込まれた碑文に



30.3.6a (図 19) クリプト（下部教会）
とコンフェッション

よって、1116 年以降に工事が開始され、「コンフェッション」がある主身廊と南北の側廊を順次増築していったとされる。完成時期についても、西ファサードと同様に、工事の中断と再開が繰り返されたために特定の時期を明確に決定することは難しい。クリプト西壁に埋め込まれていた 1142 年の墓碑銘から、その年頃には完成していたとする見方が多いが、もっと早くに完成していたとする説や、1180 年頃とする説もある。いずれにせよ、前に触れた 1209 年のトゥールーズ伯レーモン 6 世の有名な贖罪のエピソードに



30.3.6a (図 20) クリプト (下部教会)

よって、少なくともその年にはクリプトがおおよそ完成していたと考えられる。

三廊式のクリプトは、上部教会の内陣の下ではなく、西側の 6 つのベイの下に位置する。入口は 3 ヶ所あり、その場所は北西の第 3 ベイ、南東の第 6 ベイ（上部教会の内陣の祭壇横から下りる。「修道院長の階段」とも呼ばれる）、そして南側の旧クロワトルに面した第 3 ベイである。M. Gouron によれば、巡礼たちはもっぱら聖堂南側にあったクロワトルから階段を使ってクリプトに下り、聖ジルの墓の前を通った。そして北側廊の階段を上って地上に戻ったという。

クリプトで最も古い部分である主身廊中央の「コンフェッション」および南側廊の東側の 3 つのベイの天井は交差ヴォールトで、「コンフェッション」を除く主身廊と、南北側廊のそれぞれ西側の 2 つのベイは交差リブ・ヴォールトとなっている。南フランスの聖堂建築において交差リブ・ヴォールトが現れた最初の例の 1 つとされる。交差リブのいくつかは、モールドディングのないシンプルな帯であるが、「コンフェッション」のすぐ西に隣接するベイ（西から 3 番目のベイ）の交差リブは、非常に美しくて手の込んだ装飾が施されている。西ファサードの基壇と同じように表面に縦筋が付けられた方形の基壇柱を四隅として、そこから太くて力強い交差リブが、扁平となった湾曲カーブを見せながらヴォールトに架けられているのであるが、そのリブには、あたかもアコーデオンカーテンのようなジャバラ折りの形をしたリボン装飾が連続して彫刻されている。この交差リブの装飾には 12 世紀のブルゴーニュ（クリュニー）の影響を認める研究者も少なくない。いずれにしても非常に豪華でエレガントなリブである。同様のリボン装飾は、今は遺構となった後陣回廊や内陣に残された壁のアーチにも部分的に認められるし、さらに言えばサン＝ジルの街に残る古い建物（Rue de la Révolution）の壁などにも見られるものである。ところでクリプトのこの交差リブの頂点にある丸い要石（クレ）には、祝福を与える見事なキリストが彫刻されており、西ファサードに見られるキリストとの類似がしばしば指摘されている。このベイの西側に架けられた横断アーチもまた太くて厚いものであるが、アーチの両側面にはオーヴ（卵形）文様がきれいに連ねられている。

中央の主身廊の「コンフェッション」の東隣のベイにも装飾の施された手の込んだ交差リブが架けられている。この装飾はリボン文様ではなく、細かくうねる波線文様となっている。ク

リプトに見られる他の交差リブも同様に太くて張り出しが大きい、その多くはやはり高さのある方形の基壇柱の上に架けられている。それらの基壇柱には柱頭はないが、主身廊西端の西壁の説教壇がある左側に下りるリブは、アトラスらしき人物彫刻のキュ・ドゥ・ランプが受け止めている（図 21）。この人物は、ヒゲを生やして耳が大きく、左右の両手を大きく上に持ち上げてリブを受け止めている。なおそのリブは途中でカーブの角度が変化しており、建設工事の途中での計画変更（おそらくは 1116 年）をうかがわせるものである。



30.3.6a（図 21）クリプトのアトラス

南側廊第 4 ベイは、このクリプトにあって唯一半円筒形ヴォールトが架かる部分である。このベイの北側の壁には大きな壁龕（ニッチ）があって、そこには 1208 年に暗殺された教皇特使ピエール・ドゥ・カステルノーの墓がある（石棺の蓋が置かれている）。彼はフォンフロワドのシトー修道会士でもあった。またこのベイと隣の第 3 ベイの間には、古い井戸が残されている。深さはおよそ 7 メートルあり、宗教戦争の際には、サン＝ジルを襲撃したプロテスタントの兵士たちがミサを行っていたカトリックの聖職者たちを襲って殺害し、聖歌隊の子供たち共々この井戸の中に投げ入れたという。その後この井戸は埋められていたが、19 世紀になってクリプトが修復された際に元通りにされた。

先にも触れたように、おそらくは 1116 年になって、クリプト（下部教会）の上に新しくロマネスク様式の大きな聖堂（上部教会）が建設された。内部は西ファサードの 3 つの扉口に対応する形で三廊式であった。全体は 8 つのベイからなる身廊に、後陣回廊および放射状祭室に取り囲まれた内陣部が続く大規模なものであった。現在の上部教会（図 22）は、その 12 世紀のロマネスクの教会が 16 世紀の宗教戦争の際（とりわけ 1562 年と 1574 年）に大きく被害を受けた後、17 世紀（1650-1655 年）に身廊の東西を 5 ベイに短縮して修復し、東端の 6 番目のベイに五角形の後陣が作られた。高さも以前の 25 メートルから 18 メートルに下げられて、交差リブ・ヴォールトが架け直された（横断アーチは尖頭形）。これらの修復の際にはロマネスク期の側壁と、身廊部分の最初の 5 つのベイのピラストル（方形の柱）が利用された。このピラストルは、現在の主身廊の南北に並ぶ大アーケードの層まで残っている。そこにある付け円柱にはコリント様式の柱頭が残されている。円柱の台座にはグリフ（ツメ／griffe）装飾が付けられている。これは内陣の



30.3.6a（図 22）上部教会

遺構でも同じである。身廊の大アーケードのアーチはかつてはロマネスク様式の半円アーチであったが、17世紀の修復によってライズ（起拱点からアーチの頂部までの高さ）が小さい尖頭アーチとなっている。南北の側廊も6つのベイからなり、その天井は身廊と同じく交差リブ・ヴォールトである。横断アーチもやはりライズの小さな尖頭形である。北側の側廊の東端のベイは、現在は聖具室となっており、その部屋の交差ヴォールトも美しい円柱が受ける。現在内陣には聖ジルの胸像と聖遺物箱が置かれている。また内陣の壁の中央に掲げられている絵画は、メルキオール・ドーズ（Melchior Doze）が1878年に聖ジルと西ゴート王ワンバのエピソードを描いたもので、聖ジルの右手は矢を受けて血を流している。身廊西端に据えられたオルガンのケースは、1701-1703年にシャルル・ボワスラン（Charles Boisselin）によって彫刻が施された。南側の側廊西端にあった鐘楼は、1622年に取り壊され、小さめの鐘塔が西ファサードの扉口の上に作られた。

現在は遺構となっているロマネスク期の聖堂の内陣および後陣についても触れておこう（図23）。内陣の周囲には後陣回廊（déambulatoire）が巡り、放射状祭室が5つ並んでおり、大きな巡礼教会の豊かさを今に伝えるものである。5つの放射状祭室のうち、東端および南北の3つが大きく、その間の祭室は小さめである。3つの大きな祭室には、それぞれ外壁に扶壁（付け柱）が付けられていた。内陣の南北両側には、それぞれ東側に向けて内部が半円形の小後陣が付く方形のベイ（礼拝室）が作られている。中央にある半円形の内陣部はピア（東ね柱）や二重円柱に取り囲まれているが、そこに残された円柱の台座には、ランオンの頭や花卉などさまざまなグリフ（griffe）装飾が付けられており、そのうちの1つ（北側の2番目のピアの台座のもの）は、円柱に足を押しつぶされた男の彫刻である。建設工事における事故の様子を表したものであろうか。内陣の中央には、近代になって作られた教皇クレメンス4世（サン＝ジル出身）の胸像が置かれている。また内陣を囲む周歩廊の部分には中世の石棺がいくつか置かれている。

内陣北側には側壁の一部が残っている（図24）。この壁にはかつてロマネスク聖堂のヴォールト（半円筒形あるいは交差ヴォールト）を受け止めていたピアが立ち上がる。そのヴォールト



30.3.6a (図23) 内陣の遺構



30.3.6a (図24) 内陣側壁の遺構

に付けられていたリブも一部分残されているが、そこには地下クリプトの第 3 ベイのリブと同じアコーディオンカーテン状のリボン装飾が見られる。このピアの上に付けられた円柱の柱頭にはアカンサスの葉飾りの輪が巡り、その上の正面および両側面には羽を広げて厳しい表情を浮かべた天使が彫刻されている（図 25）。天使はヴェールがかけられた左手に丸いものを掲げているが、これはホスチア（聖体のパン）なのかあるいは何らかの聖遺物なのかは判然としない。この柱頭からは向かって左側に、アカンサス様の葉飾りとギリ



30.3.6a（図 25）内陣側壁の天使

シア風雷文が連続する水平のコーニス（下面は花卉彫刻）が続き、そのコーニスは葉飾りや人物などのコンソールが支えている。コーニスの向かって左には、内側と外側に隅切りされたオキュルス（丸窓）が半分だけ残っている。その大きくて見事な隅切り部分を内と外の両面において環状に囲んでいるのは、オーヴ（卵形の連続装飾）、ビエツト、連球紋（パール・エ・ピルエット／ビーズ&リール）などである。

この内陣側壁には有名な「サン＝ジルの螺旋階段（vis）」が破壊を免れて残されている（外側から見ると側壁に付けられた小円塔のように見える）。鐘楼に登るために作られた 12 世紀のこの螺旋階段は、中世以来完璧な石組みとその美しい仕上がりによって知られ、石工たちの多くはフランス遍歴の修行旅行の際にここを訪れて見学し、賞賛の念とともに切石による建築法を学んだという。彼らの中には自分の名前を刻んだ者もいたが、そのうち最も多いのは 17 世紀半ばのもので、その時期はちょうどフランスの載石（切石）術の最盛期にあたるとも言われる。

この内陣の遺構側から現在の上部教会の後陣を見ると、向かって左（南）側から順に南側廊、主身廊、北側廊に対応する後陣の建物が並んでおり、その順に高くなっている（図 23）。右（北）の後陣壁は、主後陣の脇にあるので本来は「小後陣」と呼ばれるべきものであろうが、主後陣よりも高さがあり、あたかも大きな塔のような外観で、東西が切り詰められる前の断面（尖頭形の横断アーチ）や柱頭彫刻、そしてコーニス彫刻を持つピアなどがそのまま残されている。この「小後陣」の内部は現在は聖具室である。主後陣は五角形で、各面の間の角部には屋根まで延びる方形の扶壁が付けられている。またそれぞれの面の高い位置には尖頭形の窓が開けられている。

現在のサン＝ジル修道院教会（abbatiale）のすぐ南側には、この修道院の古いクロワトル（内庭回廊）ならびにそれを取り囲んでいた建物の遺構（東西および南側）が部分的に残されている。もともとのクロワトルは、その北側のギャルリー（半円形アーチが連なるアーケードと廊下）が現在の上部教会の南の側廊部にあたり、さらにそのギャルリーの北側にあった建物

は、ちょうど現在のクリプトの主身廊に位置していた。巡礼の最盛期（12世紀）、サン＝ジルの街にいたとされる135もの両替商の商売は、修道院のこのクロワトルとテンプル騎士団の居館（後述）の中に制限されていた。クロワトルからは中世の墓地も見つかっている。1538年の修道院の世俗化以来、修道士たちが去ったことで修道院の建物の荒廃が進み、クロワトルにも俗人が居座り、そこにあった墓地も俗人が使用するようになった。宗教戦争期にクロワトルとそれを取り囲



30.3.6a (図 26) 旧クロワトル（南側）

む修道院の建物の多くの部分が被害を受けた。修道院居館の東棟はペニタン・ブラン（白色苦行会）の礼拝堂として使用された。大革命後は国有財産として売却され、その後はブドウやオリーブの栽培農家が所有し、倉庫として使用した。

現存する修道院の建物のうち、クロワトルの南側の棟は比較的保存状態が良い（図 26）。かつては1階部分にニッチの壁アーチが12並んでいたが、そのうち西端の2つ（3つ目は半分だけ）が残されており、あとは壁面にアーチの痕跡が認められるだけである。また2階部分には、縦に長いロマネスク様式の8つの窓（半円頭形で外に向けて隅切りされている）が並んでいたが、これもまた現存するのはそのうちの3つだけである。それらの窓のアーチ（小タンパン）部分はモノリスとなっている。南棟の壁の上階部分の東端には大きな半円アーチ形の出入口が残されている（ただし埋められている）。これはロマネスク期の古い上部教会との行き来のためのものであったと思われる。西棟もその一部が残っている。1階部分が旧修道院の建物で、交差リブ・ヴォールトが架かるベイが南北に3つ並んでいる。2階は民家となっている。かつてペニタン・ブランが使用した東棟は、2019年の時点で修復工事中であった。

この旧クロワトル側からは、幅のある扶壁が並ぶ現在の上部教会の南側壁面を見上げることになる。それは下半分が現在のクリプトの南壁、上半分は上部教会南側廊の外壁である。扶壁に挟まれた各ベイにおいては、クリプト部分には隅切りされた半円頭形で横幅のある比較的大きな窓（ロマネスク様式）が、また上部教会側廊部分にはそれよりも細長くなった尖頭形の窓（ゴシック様式）が開けられている。この後者の窓には、かつては左右両側に小円柱が置かれていたが、現在はすべて失われている。なお、すでに何度か触れた有名な「1116年の碑文」は、この旧クロワトルの北側のギャルリーで目にすることができる。上部教会南壁の1番目の扶壁（西ファサードの南西角の扶壁を数えるなら西から2番目の扶壁）の下に埋め込まれている。

サン＝ジル修道院教会の西ファサードの前のレピュブリック広場から少し西に入ったところにはロマネスクの家（Maison romane）が残されている（図 27）。後に教皇クレメンス4世となるギー・フルク（Gui Foulques／教皇在位1265-1268年）の生家とされる。サン＝ジルで生まれた正確な年は不明で、12世紀末頃とされる。建物は3階建てで、1階部分の装飾（ダイア

柄の連続するフリーズ）は、ドローーム県のサン＝レストイテュ（Saint-Restitut）の塔から影響を受けたものであるとも言われる。2階と3階には二重窓が4つずつ並び、それぞれ窓の間には小円柱が立ち、4種類の柱頭彫刻が付けられている。また2階の二重窓のすぐ上には、1つあるいは3つ一組となった花卉や星形の装飾が彫刻されている。現在この建物の内部は、主にサン＝ジル修道院で見つかった彫刻類が展示される碑文博物館（Musée lapidaire）となっている。マタイを象徴する大きく羽を広げた天使の見事なレリーフ、羊と羊飼いの大きなフリーズの断片、トビトの物語の彫刻、大きなワシ、アダムとイブの柱頭彫刻など。中でも注目すべきは、1949年に発見されたタンパンの断片である。おそらくは「最後の審判」の一部で、キリストを囲む形で4人の使徒が座っている。ただし、これはサン＝ジルの街で破壊されたサン＝マルタン教会のものではないかとも言われている。



30.3.6a (図 27) ロマネスクの家

最後に、サン＝ジルにあった聖ヨハネ騎士団（聖ヨハネ病院騎士修道会）とtemplar騎士団についても触れておきたい。最初に述べたサン＝ジルの歴史のところでも触れたが、この街にこれら2つの騎士団が定着したのは、ここが何よりも聖地エルサレムへの巡礼の出港地でもあったためである。最初にサン＝ジルに進出したのは聖ヨハネ騎士団で、トゥールーズ伯レーモン4世（サン＝ジル）の息子ベルトランが1109年に十字軍に参加して聖地に向かう直前にサン＝ジルに病院を設立したことによる。ただしそれがレーモン4世によるものであったとする説もあるし、あるいはこの騎士団の創設者で初代総長でもある福者ジェラルド（プロヴァンスのマルティイグまたはイタリアのアマルフィ出身）が、1101年頃にパレスティナからフランスに戻った際、上陸したサン＝ジルに病院を作ったのが最初であるとも言われる。いずれにしてもサン＝ジルのこの病院は、ヨーロッパで最も古い聖ヨハネ騎士団の活動拠点の1つとなった。

この騎士団は、1113年に教皇パスカリス2世から認可を受けて以降、その勢力を漸次拡大していった。13世紀になると、話す言語によってラング（またはプロヴィンス）と呼ばれる7つの管区（または軍団）に分けられるようになるが、サン＝ジルはトゥールーズとともに、そのうちの1つであるラング・ドゥ・プロヴァンス（Langue de Provence）を構成するグラン・プリウレ（Grand prieuré）となった（日本語で「プリウレ」は普通「小修道院」と訳すことが多いが、そうすると「グラン・プリウレ」は「大小修道院」となってしまう）。サン＝ジルのグラン・プリウレは、南フランス各地にコマンドリー（騎士団の地区拠点）を作り、18世紀にはその数は56あったとされる（トゥールーズの場合は20）。サン＝ジルにおけるこのグラン・プリウレの場所は、街の南側の現在のフランソワ・グリフウイユ大通りと、同じく街の南側を流れる運河の間であって、シャンジー大通りの南側に当たる場所に広がっていた。また敷地の中には聖ヨハネに捧げられた聖堂が建てられていた。墓地もそれに隣接して作られていたようである。しかしこのグラン・プリウレは、16世紀の宗教戦争によって被害を受け、騎士団の拠点と

しての機能はアルルに移されてしまい、その後はコレジアルなどとして使用されたが荒廃が進み、大革命後には完全に取り壊されてしまった。

一方、テンプル騎士団がサン=ジルおよびその近隣において土地を取得したのは1139年（または1136年）以降のことで、1140年代にはちょうど今のシャンジー大通りの北側に、聖ヨハネ騎士団（グラン・プリウレ）の敷地に隣接する形で自らのコマンドリー（本部居館）を建設した。テンプル騎士団においても、サン=ジルのこのコマンドリーはやはり重要な役割を担い、周辺地域にある10ヶ所もの支部コマンドリーを統括していた。周知のようにテンプル騎士団は、聖ヨハネ騎士団創設の少し後の1119年に創設され、1129年に教皇ホノリウス2世によって認可された。それ以降は十字軍における活躍も相まって、聖ヨハネ騎士団を凌ぐように急速に拡大・発展した。しかし大きくなり過ぎたその軍事的、政治的、経済的な勢力が禍して、1307年にフランス国王フィリップ4世（ル・ベル）によって壊滅させられ、さらに1312年にアヴィニヨンの教皇クレメンス5世によって異端とされ活動が禁じられた。サン=ジルでは25名の騎士団員が逮捕されたと伝えられる。またその際サン=ジルの団長（管区長）であったピエール=ベルナル・ドゥ・サルグ（Pierre-Bernard de Salgues）はアレスの城に拘留されて拷問を受けている。テンプル騎士団の解散後、所有する土地や建物その他の資産は聖ヨハネ騎士団に引き継がれたのであった。

Bibliographie :

饗庭 (1995) 78-81 頁; 饗庭 (1999) 207-209 頁; 馬杉 (2001) 146-147 頁、158-159 頁、168-170 頁; 越 (2009) 139-142 頁; 杉 (1992) 135-146 頁; 船越 (2015) 80-83 頁、292 頁; 渡邊 (2008) 35-39 頁、219-225 頁; ニール (1979) 75-79 頁; フォション (1975) 132-133 頁; フォション (1976a) 293-295 頁、305-306 頁; マール (1996) 56-59 頁、118-125 頁、157-158 頁、176-177 頁、204-205 頁、213-214 頁; メリメ (1979) 362-367 頁、491-492 頁; Aubarbier (2007) p.261; Aubert (1929) pp.59-67; Aubert (1936) pp.369-372; Aubert (1946) pp.143-149; Borg (1972) pp.122-132; Bardy, et al. (1966) pp.144-147; Blanc, et al. (2015) p.33, pp.46-58, pp.87-89, pp.131-132; *CAG*, 30/3, pp.615-626; Carraz (2020) pp.85-109, pp.477-490; Charles-Roux (1984) pp.9-79; Clément (1993) pp.181-188; Colish (1972) pp.451-460; De Lasteyrie (1902) pp.80-115; Droste (1990) pp.110-113; Ferguson O'Meara (1977) pp.94-140, p.179; Garrigou-Grandchamp (2000) pp.301-309; Girault, Marcel et Pierre-Gilles (2007) pp.11-32, pp.225-243; Goiffon (1881) pp.289-296; Goiffon (1882) pp. 113-114; Gouron (1933-1934) pp.44-50; Gouron (1936-1937) pp.35-53; Gouron (1950) pp.104-119; Hamann (1934) pp.19-33; Hansen (2013) pp.345-374; Hartmann-Virnich et Hansen (2000) pp.271-292; Hartmann-Virnich et Hansen (2013) pp.293-338; Hartmann-Virnich, Hansen, Echtencher (2021) pp.75-94; Kingsley Porter (1923) pp.267-302; Labande (1910) pp.168-181; Lassalle (1966) pp.79-89; Leriche-Andrieu (2002) pp.25-29; Maguelone (1990) pp.27-102; Maguelone (1993) pp.9-24, pp.32-62; pp.171-175; Mallet (2000) pp.265-269; Marconot (2008) pp.1-64; Nicolas (1912) pp.17-31, pp.42-65; pp.81-92, pp.181-194, pp.231-270; Nougaret et Saint-Jean (1975) pp.42-44, pp.298-303; Pérouse de Montclos (1996) pp.486-

496; Schapiro (1935) pp.415-431; Scott (1981) pp.119-124; Stoddard (1972) pp.72-75; Stoddard (1973) pp.3-16, pp.45-59, pp.127-160, pp.161-174; Thiebaut, et al. (1989) pp.2-5.

Web-site : 山本和寛 (1989) .

30.3.6b サン=ジル／サント=コロンブ礼拝堂

(Chapelle Sainte-Colombe, Saint-Gilles) ▲privée

サン=ジルから西へおよそ 9 キロである。フランクヴォー (Franquevaux) からジェネラック (Générac) へ向かう県道 D197 を北におよそ 6 キロ、ジェネラックからは 5 キロのところにドメヌの入口があり、そこから東へ 800 メートルほどその敷地の中の小径を登ると、ドメヌの居館に組み込まれる形でロマネスクの小さな修道院教会が残されている。なだらかな丘陵の森が織りなす豊かな自然に囲まれている（ただし私有地内なのでアクセスは不可）。

建設は 11 世紀末あるいは 12 世紀前半頃とされる。史料における初出は 1119 年の教皇カリストゥス 2 世による教書である。その時期にはここに小さな修道院（プリウレ）があったとされ、現在のドメヌの建物はその跡地に建てられたものである。大革命後、国有財産として売却され、このドメヌの所有となった。それ以来、聖堂の中は 2 階建ての倉庫に改造されていたが、最近になって中段の床が取り払われて、かつてのロマネスク聖堂の様子が復元されている。聖堂の入口は南側にあり、その扉口の上に架けられた半円形のタンパンには、初期キリスト教時代の石棺のパネルが再利用されてはめ込まれている。パネルの左半分では、羽を持つ 2 人のキューピッドがメダイオン掲げ持っており、そのメダイオンの中には死者（女性のように見える）の上半身が彫刻されている。右半分ではやはり羽を持つキューピッドが四角い板のようなものを支え持っている。アルルの初期キリスト教時代の石棺の伝統をくむものであるとされる。側壁の上部の屋根部分には単純な幾何学紋様や動物の頭らしき彫刻が施されたモディオンが並んでいる。

聖堂内部は短い単身廊形式で、東側には半円形の後陣が付く。身廊は横断アーチとそれを受ける壁付きの円柱によって 2 つのベイに分けられ、側壁には半円形の壁アーチが付けられている。後陣（内陣）との間には凱旋アーチが架かり、その凱旋アーチの西に隣接する幅の狭いベイにも小さな壁アーチが架けられているのが見られる。後陣の中央には十字形の開口部がある。後陣中央部にも窓が開けられており、この窓は外側は細長い、内部に向けて隅切りされており、左右両側は細くて繊細な小円柱によって、そして円頭部は円筒形のモールディングによって縁取られている。後陣にはこの窓の下に、ほぼ方形の大きな窓もあるが、これは近代になって所有者の農家が作業用に開けたものであろう。開口部（窓）は反対側の西壁上部と第 2 ベイの南北側壁にもあるが、そのうち西壁のものは半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓で、側壁の窓は、南北共に半円頭形ではあるもののロマネスク期のものではなく、大きくて比較的新しいものである。南側の窓はそのベイに付けられた壁アーチの中央に開けられているが、扉口から見るとその斜め上にあたる位置にある。

聖堂内部で注目すべきは、凱旋アーチを受け止めるピアの円柱に付けられた柱頭彫刻である。上に向けて葉を広げたアカンサスとヴォリュート（渦巻き）、花卉、そして冠板には二条線によるパルメット風の組紐文様が彫刻されている。A. Clément は、この柱頭彫刻の作者とサン＝ジル修道院教会の彫刻師を結びつけて考えている。

Bibliographie :

Buholzer (1962) pp.128-129; *CAG*, 30/3, pp.626-627; Clément (1993) pp.190-191; Nougaret et Saint-Jean (1975) pp.44-45.

30.3.6c サン＝ジル／サント＝セシル・デスタジェル小修道院教会

(Église Sainte-Cécile d'Estagel, Saint-Gilles) 遺構／Privée▲

サン＝ジルから県道 D42 で北へ約 6 キロで左折し、ループ通り (Chemin de Loubes) を 2.5 キロ西へ向かう。かつてのエスタジェル小修道院 (プリウレ) とされる建物の壁の一部が、パルメットやオーヴの装飾文様の施された扉口のリンテルなどとともに、今は結婚式などさまざまなイベントを行うドメヌの中に残っている (私有地の中なので、通常はアクセスできない)。

エスタジェルの名は、878 年にサン＝ジル修道院に属するプリウレとして史料に出てくるのが最初である。サン＝ジル傘下であったために、本院と共にトゥールーズ伯との抗争に巻き込まれ、レーモン 4 世の息子でトゥールーズ伯のベルラン (Bertrand／在位 1105-1108/1109 年) の時に破壊されている。その後本院であるサン＝ジル修道院のロマネスク期の聖堂と同じ頃 (1116 年か) に再建され、1118 年にここを訪れた教皇グラシウス 2 世によって聖別された。翌 1119 年の教皇カリストゥス 2 世の教書にも、サン＝ジルの所有としてその名が見える。その後 16 世紀の宗教戦争の時に被害を受け、17 世紀初めには火災に遭っている。大革命の後には国有財産として農家に売却された。その農家は古い聖堂を 2 階建てに改造し、1 階部分は馬小屋、その上は穀物倉庫として使用したという。後陣は失われ、西ファサードはドメヌの建物の中に組み込まれている。現在ドメヌの中に残るのは、サント＝セシル聖堂の 2 つのベイの側壁とそこに付けられた半円形の壁アーチ (ただし上半分のみ)、ベイの間で横断アーチを受けていたピラストルと円柱、そして聖堂の西ファサードと思われる壁に開けられた出入口に残る小さなアーキヴォルトと水平のリンテルである。そのリンテルはかなり摩耗しているが、上下二段になって連なる植物の葉飾り (アカンサスカ) とオーヴ (卵形文様) が彫刻されている。ただし、A. Clément はそれを後の時代のレプリカであるとしている。その真偽については不明である。

かつてサント＝セシル聖堂の第 1 ベイ南側にあった扉口とそれを飾っていたタンパンおよびリンテル (12 世紀初め頃) が、現在はパリのルーヴル美術館の中世彫刻部門に展示されている (図 1)。エスタジェルの旧プリウレを手に入れた農家が、1929 年に経済的理由からラングドック・ロマネスク彫刻の至宝とも言えるこの扉口を古美術商に売り払ったものを、ルーヴルが入手したのである。



30.3.6c (図 1) Ste-Cécile d'Estagel
Musée du Louvre



30.3.6c (図 2) Ste-Cécile d'Estagel
Musée du Louvre (部分)

この扉口の一番外側は無装飾のヴシュール、その内側は円筒形のモールディングのようなヴシュール、そして美しいパルメット装飾が豊かに施された半円形ヴシュールが続き、その内側にタンパン、さらにその下にリンテルが置かれている。タンパンには円形あるいは半円形の 5 つのツルのリング（輪）の中にパルメット文様が彫られている。中央のリングの中には、鋭いクチバシを持って大きく羽を広げる見事な姿の鳥がいる（図 2）。珍しいのは、その鳥とともに、鳥が産んだであろう丸い卵が彫刻されていることである。リンテルにはカロリング的な二条線の組紐文様に縁取りされて、やはり豊かに葉を広げるパルメットが横に連なる。その中央には、2 羽の鳥がお互いのクチバシを合わせるようにして向かい合っている姿が彫刻されている。同じく、このリンテルの下面にも連続するパルメット文様と、その中央部分に横を向いたクチバシのするどい鳥が彫られている。こうしたパルメットや鳥の彫刻装飾は、本院であるサン=ジル修道院の 12 世紀ロマネスク期の聖堂のものとよく似ているとされる。あるいはプサルモディ修道院 [30.3.7b] 傘下の聖堂装飾によく見られるものであると言われることもある。

Bibliographie :

Aubert (1933) pp.135-140; Buholzer (1962) pp.126-128; Clément (1993) pp.189-190; Hartmann-Virnich, Hansen, Echtencher (2021) p.77; Nougaret et Saint-Jean (1975) p.44; RIP (Musée du Louvre)

補遺

30.1.7b グダルグ／カスヌーヴのノートル＝ダム礼拝堂

(Chapelle Notre-Dame de Caseneuve, Goudargues)

privée

拙論「南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂 1」（東海大学紀要文化社会学部、第 4

号、2020年10月)において「グダルグ修道院付属ノートル=ダム=エ=サン=ミシエル教会」を採り上げたが、その中で「カスヌーヴのノートル=ダム礼拝堂」について、2005年の時点では外壁がほとんど蔦で覆われていて建物の様子をはっきりと見るができなかったと記したが、2023年3月に再訪した時には蔦が取り除かれており建物全体を目にすることができたので、あらためて項目を立てて説明を追記する。

グダルグのノートル=ダム=エ=サン=ミシエル修道院教会の南側には、かつてのクロワトル（内庭回廊）があって、その西側には修道院の大広間（倉庫あるいは参事会室とも言われる）が残されている。その2階は修道士たちの寝室（dortoir）であったが今は失われている。カスヌーヴの旧ノートル=ダム礼拝堂は、このクロワトルの南端にあたる。ノートル=ダム=エ=サン=ミシエル教会からは南に30メートルほどの所に建っている。

グダルグのこの場所に最初に小さな修道院が創建されたのは8世紀末頃のカロリング期、シャルルマーニュの治世下のこととされる。時代の経過と共に荒廃し半ば廢墟化するが、1130年頃にアニアーヌ修道院（アニアーヌはグダルグ修道院を所有していた）によって修復・再建された。その後は再びヴォールトが崩落するなどしたが、12世紀中に2度目の修復工事が行われた。14世紀の百年戦争期には横行する傭兵くずれの野盗団などに対処するためグダルグの街を取り囲む周壁が建設されるが、その際にはこの礼拝堂の後陣部分が周壁の塔として利用されたとされる（この周壁の一部は、礼拝堂の20メートルほど西に今でもその土台が残っている）。大革命（1789年）の後、農家がこの礼拝堂を手に入れ、倉庫として使用した。現在は個人所有の住居に改造されていて内部の見学はできない。

2 ベイからなる方形の身廊に半円形の後陣が付くだけのシンプルで小さな聖堂である。身廊部の東西の両端に扶壁が付けられている。扶壁の幅は西端のものの方が広いが、その高さは東端のものよりも低くなっている。身廊側壁（南側）には外側に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の窓が、2つのベイに対応する形で2つ開けられている。その隅切りの頭部は半円頭形のアーチであるが、アーチの内側は半円形のモノリスとなり、さらにそのモノリスの下の開口部自体は細長い方形の窓となっている。扶壁を除く身廊部の壁面は、あまり切り整えられていない石がラフに積まれており、足場を組むための小穴がいくつも見える。向かって左下の1階部分に、所有者が開けたと思われる大きな窓

（以前は倉庫の出入口）があり、現在の居住者の生活感を醸し出している。西ファサードにも1階部分に居住者のための出入口と窓があり、さらに2階と3階にも方形の窓が開けられている（つまり現在の居住者はこの礼拝堂を3階建ての住居として使用している）。後陣は半円形で石積みはやはりラフなものである。後陣の南側には鉄格子付きの出入口が、そして東側（中央部）にも方形の大きな窓が縦に2つ並べて開けられている。北側の上部にも窓が開けられている。こ



30.1.7b Notre-Dame de Caseneuve

の建物が、もとは8世紀末にまでさかのぼる古い歴史遺産であるという雰囲気があまり感じられないのが残念である。

Bibliographie :

Labande (1902) pp.109-131; RIP.

30.1.7c グダルグ／サン＝ミシュレ礼拝堂（Chapelle St-Michelet, Goudargues）遺構

同じく拙論「南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂1」（東海大学紀要文化社会学部、第4号、2020年10月）で採り上げた「グダルグ修道院附属ノートル＝ダム＝エ＝サン＝ミシュレ教会」の最後に「サン＝ミシュレ礼拝堂」の場所が確認できなかったと記したが、2023年3月の調査の際に確かめることができたので、あらためて項目を立てて追記する。

グダルグから県道 D371 (route de Frigoulet) をおおよそ 700 メートル北に行くと、キャンピング・コテージ村があるので、その手前を右折して細いダート道を東に入る。セーズ川沿いにあるサン＝ミシュレの小丘の南側を 220 メートルほど行くと、その小丘に登る道（左）とグダルグ方面に戻る道（右）に分かれるので、それを左に入るとすぐ（約 30 メートル）のところ、道の右側（南側）にサン＝ミシュレ礼拝堂の遺構がある。グダルグに残るカスヌーヴのノートル＝ダム礼拝堂 [30.1.7c] と同じく 8 世紀の末頃のカロリング期に、ただしカスヌーヴよりも少し前に、アキテーヌ伯ギヨーム・ドウ・ジェローヌ (Guillaume de Gellone／またはギヨーム・ダキテーヌ Guillaume d'Aquitaine) が、イスラームに対する勝利を記念して建設したとされる。史料にその名が最初に現れるのは 815 年のことである。グダルグから少し離れていたからか、カスヌーヴのように 12 世紀に大きく修復の手が加えられるということもなく、中世の間に廃墟化したまま今日に至っているようである。ただし古い墓地が隣接しており、墓石の中には 19 世紀のものもあるので、あるいは古い形のまま墓地教会として細々と使用され続けていたのかも知れない。

礼拝堂は方形のシンプルな形で、現在残る遺構は、身廊の北側の側壁、西側の壁、そして後陣の壁面の一部である。南壁は消滅している。外壁はゆるやかに整形された石がラフに積まれている。崩れかけた西壁にはかつての扉口の名残が見られる。ただし完全に埋められていて、半円形のアーキヴォルトだけが残されている。北壁の中ほどの位置にも半円頭形の馬蹄形の開口部があり、下半分が石で埋められている。そのすぐ左側には扶壁 (contrefort) のような張り出しが見られるが、L.-H. Labande は、この聖堂には扶壁はなく、その痕跡さえ見られないとしている。東端にある後陣は、ラングドックのカロリング時代の聖堂にしばしば見られるように半円形ではなく平面形（つまり方形）となっている。



30.1.7c Chapelle St-Michelet

その中ほどには半円頭形の開口部が見られる。隅切りはされていない。

聖堂内部は身廊と内陣（後陣）の 2 つの部分からなる。全長がおよそ 8 メートル、幅 4 メートル身廊部は 2 ベイからなっていたようで、ベイの間を区切るピラストルの名残が北壁に見て取れる。身廊の上に架かっていたヴォールトは完全に失われている。方形の後陣の上には円形の半ドームの一部がわずかに残されている。この後陣壁面と半ドームの境目（起拱点）には、比較的整形された大きめの白い石が帯状に連ねられている。後陣の壁の中央には半円頭形の窓が開けられ、また北側の壁面には、下の方に小さな半円頭形のニッチが付けられている。またその周囲の壁面の組石には赤いレンガがはめ込まれている。礼拝堂には外部にも内部にも装飾の類いはまったく見られない。

礼拝堂の遺構の東側には打ち捨てられた古い墓地が広がっている。ただし墓石は多くはない。比較的保存状態の良い 19 世紀の大きな墓石が墓地を取り囲む壁のすぐ外側に残されている。墓石の上には長い十字架が彫刻されているが、その中ほどの部分には太陽が光を放ちながら輝いている。さらにその十字架の左右には小さな星と花卉が彫られている。

Bibliographie :

Christian (1949) pp.49-56; Labande (1902) pp.120-123; RIP.

30.1.18d トレスク／サント＝マドレーヌ礼拝堂

(Chapelle Sainte-Madeleine, Tresques) 遺構

拙論「南フランス・ガール県東部のロマネスク聖堂 2」（東海大学紀要文化社会学部、第 5 号、2021 年 2 月）で採り上げた「30.1.18d トレスク／サント＝マドレーヌ礼拝堂(Chapelle Sainte-Madeleine, Tresques) 遺構」は、紀要原稿発表時には、場所が確認できなかったとしたが、その後の再度の現地調査（2023 年 3 月）においてその場所を確かめることができたので、あらためてその位置を記しておく。

その場所は、トレスクから県道 D5 を北のバニョル＝シュル＝セーズ方面に約 3 キロである。「Rue de Tessan」が右（東）に分岐するところの手前（南）約 250 メートルにあたる。遺構は D5 から東に 50 メートル入ったところにある。数件の住宅が集まる地区の入口あたりに位置するが、私有地内ではない。

2 ベイからなる身廊の南北の側壁の土台部分と、東端の半円形の後陣の土台部分が残されている。南側の外壁には、大きくて強固な扶壁が付けられていたことが見て取れる。内部においては、身廊の 2 つのベイを区切っていたピラストルと、身廊と内陣の間の凱旋アーチを受けていたピラストルの土台も残されている。また注目すべきは内陣の下に地下クリプトの遺構があることで、身廊の西側のベイ



30.1.18d Ste-Madeleine de Tresques

にそこに入るための入口が開いている。ただしこの地下クリプトは半ば土砂に埋もれてしまっている。後陣の壁には、中央と北側の低い位置に小さな開口部があり、それぞれ地下クリプトと通じている。

Bibliographie :

Clément (2000) p.371; Labande (1902) pp.219-222.

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、文献などは和書、翻訳書、欧文文献（ファーストネームは略）、GV と RIP、Web-site の順に記した。

CAF : *Congrès Archéologique de France.*

CAG : *Carte Archéologique de la Gaul.*

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

饗庭孝男（1995）：『ヨーロッパ古寺巡礼』新潮社。

饗庭孝男（1999）：『世界歴史の旅／フランス・ロマネスク』山川出版社。

馬杉宗夫（2001）：『ロマネスクの美術』八坂書房。

越宏一（2009）：『中世彫刻の世界』岩波書店。

杉富士雄（1992）：『プロヴァンスの海と空－歴史と文化の旅』富岳書房。

船越一幸（2015）：『ロマネスクの社会を散歩する』共同文化社。

渡邊昌美（2008）：『異端者の群れ－カタリ派とアルビジョア十字軍』八坂書房。

ニール、フェルナン（1979）『異端カタリ派』渡邊昌美訳、文庫クセジュ、白水社。

フォション、アンリ（1975）：『ロマネスク彫刻－形態の歴史を求めて』辻佐保子訳、中央公論社。

フォション、アンリ（1976a）：『西欧の芸術 1 ロマネスク（上）』神沢栄三ほか訳、鹿島出版会。

フォション、アンリ（1976b）：『西欧の芸術 1 ロマネスク（下）』神沢栄三ほか訳、鹿島出版会。

マール、エミール（1996）：『ロマネスクの図像学（上）』田中仁彦ほか訳、国書刊行会。

メリメ、プロスペール（1979）：「南仏紀行ノート（1835年）」、佐藤功訳、『メリメ全集・第6巻』所収、河出書房新社、362-367頁、491-492頁。

Aubarbier, Jean-Luc (2007) : *La France des Templiers*, Bordeaux, Éditions Sud Ouest.

- Aubert, Marcel (1929) : *La sculpture française au début de l'époque gothique*, Paris, Les Éditions du Pégase.
- (1933) : « La porte romane d'Estagel au Musée du Louvre » in *Monuments et mémoires de la Fondation Eugène Piot*, tome 33, fascicule 1-2, pp.135-140.
- (1936) : « Les dates de la façade de Saint-Gilles. À propos d'un livre récent », in *Bulletin Monumental*, tome 95, no.3, pp.369-372.
- (1946) : *La Sculpture française au moyen-âge*, Paris, Flammarion.
- Bardy, Benjamin, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes Languedoc Roussillon*, Paris, Robert Laffont.
- Blanc, Elisabeth, et al. (2015) : *Saint-Gilles (Gard) , Secteur sauvegarde, rapport de présentation*, Direction regionale des affaires culturelles de Languedoc Roussillon, Service territorial de l'architecture et du patrimoine du Gard.
- Borg, Alan (1972) : *Architectural Sculpture in Romanesque Provence*, Oxford University Press.
- Buholzer, Jean-François (1962) : « Notes sur quelques églises romanes du Gard », in *Annales du Midi*, tome 74, no.58, pp.121-137.
- Carraz, Damien (2020) : *L'ordre du temple dans la basse vallée du Rhône (1124-1312)* , Lyon, Presse universitaire de Lyon.
- Charles-Roux, Jules (1984) : *Saint-Gilles : Sa légende, son abbaye, ses coutumes*, Raphèle-lès-Arles, Marcel Petit C.P.M.
- Christian, M (1949) : « Les ruines carolingiennes de Goudargues et le site militaire connexe du Castrum Planitium au pays d'Uzès », in *Comptes rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 93e année, no.1, pp. 48-56.
- Clément, Pierre Albert (1993) : *Églises Romanes oubliées du Bas Languedoc*, Montpellier, Les Presses du Languedoc.
- (2000) : « Saint-Martin de Jussan », in *CAF (1999/Gard)* , pp.371-375.
- Colish, Marcial L. (1972) : « Peter of Bruys, Henry of Lausanne, and the Façade of St.-Gilles » in *Traditio*, no.28, Fordham University Press, pp.451-460.
- De Lasteyrie, Robert (1902) : *Études sur la sculpture française au moyen âge*, Paris, Éditions Leroux.
- Droste, Thorsten (1990) : *La France romane*, Paris, Les Éditions Arthaud.
- Ferguson O'Meara, Carra (1977) : *The Iconography of the Façade of Saint-Gilles-du-Gard*, New York, Garland Publishing.
- Garrigou-Grandchamp, Pierre (2000) : « La Maison romane de St-Gilles », in *CAF (1999/Gard)* , pp.301-309.
- Girault, Marcel et Girault, Pierre-Gilles, dir. (2007) : *Livre des Miracles de saint Gilles*, Orléans, Paradigme.

- Goiffon, Etienne (1881) : *Dictionnaire topographique, statistique et historique du diocèse de Nîmes*, Nîmes.
- (1882) : *Bullaire de l'Abbaye de Saint-Gilles*, Nîmes, Imprimerie P. Jouve.
- Gouron, Marcel (1933-1934) : « Date des sculptures du portail de l'église Saint-Gilles », in *Bulletin de la Société d'étude des sciences naturelles de Nîmes et du Gard*, pp.44-50.
- (1936-1937) : « La cathédrale romane de Nîmes », in *Bulletin d'histoire et d'archéologie de Nîmes et du Gard*, no.4, pp.35-53.
- (1950) : « Saint-Gilles-du-Gard », in *CAF (1950, Montpellier)* , pp.104-119.
- Hamann, Richard (1934) : « The Façade of St. Gilles : A Reconstruction », in *Burlington Magazine*, vol.64, no.370, pp.19-33.
- Hansen, Heike (2013) : « La façade de l'ancienne abbatale de Saint-Gilles-du-Gard : Recherches d'archéologie du bâti sur la construction » in *Bulletin monumental*, tome 171-4, pp.345-374.
- Hartmann-Virnich, Andreas et Hansen, Heike (2000) : « La façade de l'abbatale de Saint-Gilles-du-Gard », in *CAF (1999, Gard)* , pp.271-292.
- (2013) : « Saint-Gilles-du-Gard : L'Église abbatale et les bâtiments monastiques, nouvelles recherches archéologiques », in *Bulletin monumental*, tome 171-4, pp.293-338.
- Hartmann-Virnich, Andreas, Hansen, Heike et Echtencher, Götz (2021) : « L'abbatale de Saint-Gilles : regards archéologiques sur le chantier roman », in *De Saint-Gilles à Saint-Jacques, Recherches archéologiques sur l'art roman*, Hartmann-Virnich, dir., Avignon, Éditions Marion Charlet.
- Kingsley Porter, A (1923) : *Romanesque Sculpture of The Pilgrimage Roads*, 10 vols., reprinted by Hacker Art Books in 1969.
- Labande, Léon-Honoré (1902) : *Études d'histoire et d'archéologie romane. Provence et Bas-Languedoc, 1. Églises et chapelles de la région de Bagnols-sur-Cèze*, Avignon, François Seguin, Paris, Picard. pp.109-131.
- (1910) : « Saint-Gilles, église abbatale » in *CAF (1909, Avignon)* , no.76, tome 1, pp.168-181.
- Lassalle, Victor (1966) : « La façade de l'Abbatiale de Saint-Gilles, Essai de resrtitution », in *École antique de Nîmes*, Bulletin annuel, Nouvelle série no.1, pp.79-89.
- (1970) : *L'influence antique dans l'art roman provençal*, Paris, Éditions E. de Boccard.
- Leriche-Andrieu, Françoise (2002) : *Promenades en Languedoc roman, Itinéraires culturels*, La Pierre qui Vire, Zodiaque.

- Maguelone, Marie-Claire Blanc-Lebedeff (1990) : *Saint-Gilles et son abbatale*, Paris, Barré & Dayez Éditeurs.
- (1993) : *Le grand prieuré des Hospitaliers de Saint-Jean de Jérusalem et les Templiers de Saint-Gilles (origines et XIIe siècle)*, Paris, Barré & Dayez, Éditeurs.
- Mallet, Géraldine (2000) : « L'ancienne église abbatiale de Saint-Gilles-du-Gard » in *CAF (1999, Gard)*, pp.265-269.
- Marconot, Jean-Marie (2008) : *Saint-Gilles, L'abbatale romane*, RIRESC-recherches sociales.
- Nicolas, César-Auguste, Chanoine (1912) : *Une nouvelle histoire de Saint-Gilles*, Nîmes, Imprimerie Générale.
- Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1975) : *Languedoc roman*, Saint-Léger-Vauban, Zodiaque.
- Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir. (1996) : *Languedoc-Roussillon, Le guide du patrimoine*, Paris, Hachette.
- Provost, Michel, et al. (1999) : *Carte Archéologique de la Gaul, 30/3, Le Gard*, Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (*CAG*) .
- Schapiro, Meyer (1935) : « New Documents on St.-Gilles », in *The Art Bulletin*, vol.17, no.4, pp.415-431.
- Scott, Judy F. (1981) : *St.-Gilles-du-Gard : the west façade figured frieze*, Frankfurt a. M, Peter D. Lang.
- Stoddard, Whitney S. (1972) : *Art and Architecture in Medieval France : Medieval Architecture, Sculpture, Stained Glass, Manuscripts, the Art of the Church Treasuries*, New York, Harper & Row (Icon Editions) .
- (1973) : *The Façade of Saint-Gilles-du-Gard, Its Influence on French Sculpture*, Middletown, Wesleyan University press.
- Thiebaut, A., et al. (1989) : *Musée de la maison romane, St. Gilles-du-Gard*, Colmar, Éditions SAEP.
- Victor-Jeolas, Roselyne (1980) : *Saint-Gilles, Notes historiques et archéologiques*, Nîmes, Imprimerie Chastanier.

Web-site

- 山本和寛 (1989) : 「サン=ジール=デュ=ガールー12世紀プロヴァンス派ロマネスク彫刻の諸相」
<https://quartetgrape.wordpress.com/saint-gilles-du-gard/> (2023.4.20 アクセス)